俳諧饒舌録

上

へ5
730
1

元木網大人著

俳諧

饒（ジヨウ）舌（ゼツ）録（ロク）

全二冊

太公書を著して饒舌と號し是を傳燈録宗山の語にもとづく事其書を寛するに援證樗博俳門の秘鍵文律の註箋たるへき蓋饒舌也

謙辞のし鳴呼公のゑ
外紗あ栞許さき哉張儀
の舌とさまれの赤さ在不
哉間ひ是を賈逵の古と
まされのまき耕すかつれ百
萬の師に退きあらく七十
の妹に下まゑし世の
俳家者流三百さ外書
哉讃さらんい舌なまし
强のうらもれ

文化元夏五

冬烘居士識

門 利
號 730
巻 1

餞舌録 上巻

凡例

明治三十六年十一月十一日購求

元木阿弥著

てにはを彼のとゝのひハ皇國のならひにして歌よむ人も発句よまれざらぬ詞なれどもおのづからそれぞれにて定りなきにしもあれハ詞の拙き未をかなへ合る哉くさしれ初学ひのともがらにて尓あきらかならふべきまを切字とのこといふあり切字といふハ手爾遠の留るべき事をいふされバ留りといふても切字といふも同じことなりそが中に余情をふくめて　なくふ　なりしふ　けて　まて　かな　で　ましかバ　けのを　あきのこされを　けせバ　なからそ留りぬるを切るとはいへども余情をふくめて留まりとなる余情をふくめて留まるハおのがまゝなるといひおはれたるとなるれバ前の例を以て其前ハこれぞもちまゆゑ切る格定れるハ発句に切句り切る格いふるを定めりともいふハ下へとほりて切る詞にていふハ詞に縁ある句を女句ハ云葉みじかき

ゆゑ切る格の事なることハいはれざれし是も切る格なき
事りとても言ハでしとゞまりて切る所ハ到る所あるべく
切る格なき／＼も切るやハおのづから句づゞまりあるもの
なり句つゞきとハ

歌ハ　一遍□　二序□　三破□　四曲□　五流□

発句ハ　一序□　二破□　三曲□

此序の所を句づゞきといひ此□破所を句の中字といふ
歌ハ遍序破曲流の五ツ発句ハ序破曲の三ツなれバ歌ハ
三十一字の言を発句十七字にてむすびバ歌ハ流の詞なる
故なれバ歌を遍流とはぶき発句の余情を含むなれ
ずれハ発句乃てにをはの切れバ余情なからし
前も発句も句つゞきて切る事なくさる事あるものにて句の中字
にて切るハきまれたり切るやハ切字を上に交てやといふ切れ

字とハ
くさてどつぬふむんゆるりきし
これを切字といふ此切字を上に交て
くや　さや　ぞや　じや　つや　ぬや　ふや　むや
んや　ゆや　るや　りや　きや　しや
といふを切るやといふ前ニハ切るやをとゞ交て下へつゞき
さるがおにゝくて切るやにて切るハなくれし所と発句と
取り合て其□切字ハ外よりかゝる事のむすび詞なるこの之

くや
意くとゞたくゑや喜の門　去来

是ハ下より上へうちかへし言て喜の門意くといふべ
たくくやゝ切りかくおもひをむりて尓をとくといふなり

新古今
おのが妻こひつゝなくや五月雨神なび山の山時鳥
是もうちかへして五月やゝ神なび山の山ほとゝぎす
おのが妻こひつゝなくやと切る言之

るや

根の雪ふとけるや浪千鳥　史邦

是も　浪千鳥根の雪ふとけるやと切り

貫之の集
霞たれて見えこし桜ハ咲けの春にハ谷ガあなんとハまや

是ハ上まゝりと切りて格あれども言ハ下へつゞきて
引やと切り前ハ切りて格言ハつよくおもゝり
きゝ句ハ切りて格らきあれるハまれなり

まや

枯まてゝ霜に融まや女郎花　枚風

是も　枯まてゝ霜に融まやと切り

詞花
ちる花もあはれとみまや

是もいそのかみふりにしまでをしむ心を
も何を見とみまやと切りて言く

ずや

花が茅にちるをバらずや八重桜　関夕

是も　花の茅にけしれ花ちるをバらずやと切り

金葉
音にきく高師の浜乃あだ波ハかけじや袖のぬれもこそすれ

是ハ袖のぬれもこそすれ音にきく高師の浜
のあだ波ハかけじやと句の中へ入て切りたるなり

つや

我ふしきが宿をも来つやけさの雪　貞徳

是も　われしきが宿をもけさの雪来つやと切り

新古今
思ひいづやみのゝお山乃ひとつ松

是ハ　みのゝを山のひとつ松ちぎりしことハいつも忘れず
思ひいづやと切りて言へいづやといふがごと
くひのやのいひなすべし

ぬや

うつり香の花もちりぬや衣え人　麦雨

是ハ「うつり香の花もちりぬや」と切り

拾遺
とふやと思ひやるぶんにたぐへきをいつぞ君が袖ハくちぬや

是ホハ切りて格言あれども五句のつめにて切り

ふや

なく声の江に横ふや郭公　素然

是もほとゝぎす一声の内に横ぎるやと切たり
千載 つきぬやとおもへのぶやいふおもひあけるみもかし別れの心を
是ハおもひなるのこゝろとほかしあらぬかれの心をよめれ
ぬやいふ事のぶやと切たり

むや 蛍飛ぶも水にをどるむや鶏合 其角

是も とり合 水飛もよそにおどるむやと切たり
古今六帖 下 流の水よどむや岩にせきかけておもしれおとし花の上に波
是ハおもしの花をしらぬしかも岩にせきかけて流のおよどむやと切るこゝろ んやといふ意合ハこゝろぶればおもしろきかな

古今 んや
波のから吹見ればおもてぞこぼれるこゝろもしぶ袖にかゝるふりきんや
叶んやといふハ波のかきせこぼれハ玉ぞとみだれける
こゝろもそで袖にかゝれるらんやハそらなを心ちふとこゝ
もとらむくもあらどとまくこのみるやいの心とこゝ
まべて んや ましや めや といふハ皆あらくこゝ

のくるやいの心なりとの心

ゆや 鴛鴦の肩に置ゆや更衣 乙由

是ハ衣かへきの肩に置ゆやと切たり
拾遺 散もしぬ山辺の住まれ木がくれの声ハ夕ゆや

るや 雪折る竹にかゝるや古草のみどり 園指

是ハ「くしのちぎり雪の竹にかゝるやと切たり是ホハ
句の中なりて切たりとめづらしけれるやと切るやの上
に変るハ つめ ぬる むる くる まる ける ある
なりの数ひのるゝハおもしく切に格のなりい
知ル見ル降ル散ル契ル守ル移ル帰ル流ル光ル鳴ル
照ル折ル成ル宿ル樵ル眺ル取ル賣ル遣ル配ル語ル
なりの数ひ字のよみに切る格のなをあるるとも
いふべし此数ひのなをりるゝハつぐるの如く叶るい
つ此もそ切れもあとしてべし又なりといふるなを

流ナガル　乱ミダル　別ワカル　思オモハル　知シラル　隠カクル　顕アラハル
頼タノマル　といふ時ハ切ての格のるゝ是をなすといふ
時ハつゞく格にてぞのや歟ホのむすび詞ハつゞまつゞく
格なれども上よりぞのや歟ホまてかゝる時ハむすびと
なりて切るゝ又上より外まてかゝる時のむすび詞ハ
つゞまホ切るゝ格なる故ニ手尓をはハ下をるとハいひそれぬ
くさつふむる故㊅ツハ切れもしつゞきもする格まて
ぞのや歟のむすび詞か外よりかゝる時のむすび
詞もうれおれし一ツ詞あるものなり

るや　氷よりさ[illegible]へあかるや初こよみ　薫太
是も初こよみおよりさへあかるやと切たり

るや　一ツところゝ拾ホなるや遅桜　其角
成
是も遅桜より一ツところゝ拾ゝあるやと切たり

れ古今　袖ひちしも月をれとハ契りおらたあさらさハさらや宇治の山でえ
是ハうされ山でゝあらさハさるやと切るゝきて
りや　前うしろありや火桶乃揺ん　存義
是も火桶のあたゝんあうしろありやと切たり
於达　春の神ふところもとむといふ事るハふたりぬぞらり不下でらりや君上
是ハ君さてらりやとくして歩さとまて切たり

る去　きや　枯尾花ホ神く力もなかりきや　勇音
けるまのきハけり此文のきまてあかりきやハあかり
けりやといふことけりとよむべき時一字おすする時を
る去のきそて切べしそも又上よりれとりまさらふべし
怪秋き　うかりたるみのふれ浦のゝせ貝むすしき名のこゝらハ歩きや
る去のきハえ禄のは乃発句よハ見えとてさべて
発句よハいらくさくれし

悦生しや

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　　左世氏

是も聞えたるひよろ〳〵と猶露けしやと切たり又
猶といふ詞の里諺ハ ヤウハリ イヨ〳〵 のこゝろ又ハふたつにハ
あらぬぞ

新古今
人をうらみつべしや却ありやとだにもとふをきかバ人をあは

是ハ怨ありやとだにもとふをきかバ人をあは
うらみつべしやと切たるこゝろ

切字やハ右の説が説句れどもく句づめにて切るが多
くて句の中ちよて切るハまれなり此切りやまた
歎息のやなどあれども切字をよそにて切る
をさんまゝにてあり 歎息のやも切るゝやなれどもその
中ニ歎息のやなぐさみに切れて只 歎息の言葉なる
るやもあり 月でや 花よや げにや よしやこの
よしや我 よしやま あらゆる歎息のや
なれども切れざること

○歎息（タメイキ ナゲキ）のやハ歎息の言葉につきて切るれバはなく格をも更
てやといひ又切字格を更てもやといへる歎息といめて
たきるすまもかなしきにもおもよきさまもあしきにも歎息と
をてはられぬきんほまで歎息の言葉につきてやと切るゝを
とるべしすべて歎息のや也て切るはやのやふの言葉とるべし

歎息や
行秋のなを（ヤツハリ）たのもしや青蜜柑　　左世氏

是ハ行く秋の青みかん猶たのもしやと切るゝ事にあり
此秋のといへる詞のこゝろをつくすべし青みかんとはいふ
くるのあり歎息も此御あり是ホの句を味ひてさとるべし

歎息や
去む月や鬘をそへてあるきけり　　其角

是も鬘をたてゝあるきけりにて言葉までて尽るハ去む月
やなと歎息の言葉につきて切るゝなるべし

歎息や
名月や桔梗刈萱をさ来べし　　吏登

是ハ桔梗ハ桔梗と見ゆるかやハ刈萱と見ゆ女郎花ハ
をミなへしと云へるところハ名月やあくと称ふの意にて
つゞきて切るなり

歌字や

捨かぬる世のにはりさまやちり掃　葛古

是も引き捨ひまてあまる世のあさまやのと切りて残りハ
世のありさまといへるが歌字のこゝろ付やを歌字のこゝろつ
きて切りやと志らるゝものハやとの字これハ切れると見え
故侍るすいとしおほくり歌字のやにて切るゝなりハ

全葉
あすはしや。こハあまぐものさまでとよ恋せよとてもますれざりけり

是ハ咲何ぞとのさまでとよ恋せよとてもまれざ
りけり湊ますやのとうちよとして切るなり

古今
ふしもぬきのふ世のかり枕とかあれ書や。ひとし来でありてし

是ハ一夜ありとかりの書やのとうちよとして
切りてなきなり

△なぐもるや八よび出しのやとも以へど何も皆々句もなかなか
をもとゝられバなぐもるやとつゞくべし前のなぐもるやも
国郡名所地名又古くいひならはせる例を以てをさ皆句
のなぐもるやハ常あることあるもありて歌字のやまでまじへ
安かれどなぐもるやハ切ざるもあればなぐもるやの下に八
なるべく切れしもあり又なぐもるやの下に動かぬ詞まて
節かるべ八十八十九二十の格なる中にもなぐもるやに八片仮
をつくし

△行年や親に志らる髪を隠しけり　越人

是ハなぐもるやまで切れざるバ下ハをよりかかりたれバ前の
かゝりなりと切るなり

△六月や峯に雲おく嵐山　去来

是ハ六月やとかゝりし山の見るに雲おくとききれたる
外のかゝりまでいると切るなり

△名月や△海もおもはず山も見ず　玄峯

是ハ賞する故ニもるやにて外なりあれハおもと切るかくのごとく切る格言なりさるハ是まで下れども一句切ずとく

△外十九　名月や△池をめぐりて終夜　ヨモスカラ　桃青翁

是も賞する故にもるやにて外よりかゝりて夜とはかり留りさるに下へめぐると二字入て下のはたらき成合て吟する事又二字二字と句切る十九の格之動かぬ言葉にて留りたるハ一字二字二字と振りて云ふをそへて吟する事なる故之これを人の切ともいへとも今さとども是まで上よりはかりかけて下はむすび詞ハ小格あり

上ぞのや数かぬてかゝる時のむすび詞ハ

くもつぬふむるき　現在　過去　し

是ありぞのや数ねのむすび詞ハつゞまりハつゞく格あり

けむすび詞をくくつぬ○ふむるきし○とあるを切てつゞまりハ〳〵ひつぬハ不のぬきハ現在しハ過去と口へ出すハ〳〵ひつて覚ゆべし

上こそとてかゝる時のむすび詞ハ

けせてねへめれ　現在　過去　しか

是ありけハくのちぢめきせハきのちぢめきてハつのちぢめきねハぬのちぢめきへハふのちぢめきめハむのはたらきれハりるのちぢめき付むすび詞をけせてね○へめれしかとあるを切てつゞまりハ〳〵ひつゝる事のしハぞのや数こそのむすびともなるとあるこそのかゝりまハ過去しかと留て余情をかなへてをさせ留ることありと覚え〳〵しかもかハかどもの略言なればしかのかをふくるハあやまりなり〳〵又こそよりかゝる時あんめせめきかめのむすびのめハんのちぢめきをあんせんなんのこと知らめけめあめてめハらんけん

にんでんのこと　くめ。そめ。つめ。たのめ。なども　くむ。すむ。
つむ。よむ。の事とんなる下知の詞のやうなるも下知に、
なるぞ　ことその事のおのづから　皇国のならひとんなる
べし

上　外よりかゝる時のむすび詞ハてにをは切る格之
く　ぞ　つぬ　ふ　むん　ゆる　り　き　し

是なり外とハぞのや疑こそなを外といふこゝろ有て
なぞも　へとどで　だ詞などよりかゝるところ我か一ツに
外なからといふと志るべし　此むすび詞もくさつ
ぬ○ふむゆる○りきししるを切てつらにひて
叙下をるゝハそれぬくおてつふむるの㊅ツハぞの
や疑ひの時も外よりかゝる時もむすび詞ハ同じ
ツ詞ことんなる　くるといへる詞も此格ハぐとむすぶ
くぐを二字にいふ時ハきつとむすぶといへる詞も
ぞとむすび二字にいふ時ハしつとむかふといふべし

ぬるもつぬとむすび　ふるもぶとむすび二字に云
時ハくつとむすび　むるもむとむすび二字にいふ時
ハみつとむすび　ゆるもゆとむすび二字にいふ時ハ
えつとむすび　ろとハいへる詞も　あがる　みぐる
しるるとむすびけるを二字にいふ時ハれつとむすぶ
格となるべし　外よりかゝる時ハろとハむすぶべし

○十八十九の格ハ　芭蕉菴桃青が俳諧秘記の中に
十七字にて余を設ハ常のこと十八十九といふハ盆
句の法へ一字二字入て吟ずべく心の切ともいふべく
となり十八といふハ十七字へ一字入るれバ十八といふ十九
とハ二字入るれバ十九といふべく盆句の論と八十七字に
ことの足りさる下を論といふ也文まゝなりて余を設ふ
て上手語のつゞかざる所あるハ

歎二十

山や花うきねくれ酒をやし　亀洞

是ハ下より上へかへして見てあれバ詞がまへの
活やしハ山や花。。。あらんと二字入てらんとて
其をはを合せて見るゝて二十の格とこれらにて
らんて上に詞のつゞかざる所の有を皆句に歌となる
べし詞を入て見てあるもその上より読なり
あるがひて一字二字三字迄に限るとあれハ十八十九
二十といふとのみて余情も四字の詞ハそのまゝざつぬ
となるべし三字の余情を入て見ての事ハ

(や) 風雅
花や雪霞や煙時しらぬふじの高根にさゆる有明の月

是もまゝりて見てあれバ時しらぬ富士の高根にさゆる
有明の月風花や雪霞や煙とあるをさかさまへ
あまりん煙あらんと三字入て見る也是に三字
入て見ての例あれバ発句に二十の格ありと云る
べし此格ハすべて何も発句も動かぬ詞にて
節りて下へ一字二字三字迄に限りてこしらへたる

入て見あまり動かぬ詞とハ字の訓に切りし格をと
かへぬ字にて留りたるを動かぬ詞にして留り
たりといへ上よりかへりにきてあらひて一字二
字三字入ることといふハ

外十八

人に影を見せて我ハ年忘 　おほせ哉

是ハ外のかへりあれバ忘と留りたる所へ扨と一字入
てと其をあはせ合て見てとして十八の格之此扨と一字
入ることあると二字入る事ハ上よりかへりにて随へバ有り
上のかへりぞの詞や蕣ホの時ハ落　来　袖とむすぶ格
上のかへり外まてかへる時ハ　落　来　袖とむすぶ格之
されバ発句にもあと留りたるハ

葉就番や蝶の翅にたきものを　　おほせ哉

といへり是も外のかへりあれバ扨とむすびて仰せけ
やといハあがもるやまてさがやとあるあて句のかゞりくり

おくのことにて切れもうごひもせずしてよるとよんの格
にハおづかぬやハまでそ句のさてくべきものによりて
本やくもと知らハ句つまりて叶ゆる扨それ
バ文章にハおれども所にもあり申いとし
もられしもと一字の言を二字にいふハ八ついと
もべしづ乃及ともく叶ず下にもいそりうるさ
しとなおもひまひそ

外

千載
山陰や岩もる清水音さえて夏の外なる日ぐらしの聲

是ハ詞のきてりかゝりられバ是も外のかりて
声といふ下へまでと一字へて叶のさて

又うごひのやよりかゝる時ハ

や十九

水鶏なくと人の心ずや佐屋泊　人心　不世拙

是ハうごひのやよりかゝりられバ泊と留りうる下へ
まるると二字入てるこて手きを成合て叶ふ

て十九の格くうごひのやよりかゝりて来るを留れるハ

古今
あし引の山ほとゝぎす我ごとや君に恋つゝいねがてにする

又うごひのやよりかゝりて動ぬ詞にて留りうるハ

や

宝治百首
時まだ山のいほをさてこめてくるを春やおそまの衣

是ハ衣と留りうる下へあると二字入て叶ふこと

○切るや　崔子の髭も黒むや秋乃風　式之

是ハ楓の風をそめ子の髭もくろむやと切るやよて切
うり叶切るやの格とあらべて見せるハ下にもむすび詞
ある格とり合て其ことの志らべさ彼乃例あるを見きを
るそのく

ぞ十九

伊勢鳴を見ぬぞまことの禅和　其角

是ハぞよりかゝりて動ぬ詞にて和と留りうる下へ
あるると二字入てるこてよを成合て叶ふことは
て十九の格く

(ぞ) 古今
神な月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞ是　十九
是もぞよりかかりて是と留りける下へあるを
二字入て呼ことく

○切るぞ　たがみめは我身の為ぞ紙衾　芳良

是は紙ふすまくるみめは我身の為ぞと切れぞてくまくて切る格は上のかかりはなく只言捨たる也

|歟十九|

春の夜はたれか初瀬の堂籠　芳良　入ル

是は歟の詞にてたれかといふよりかかりて籠と留りける下へあるを二字入て下を略てはを合て呼ことと成て十九の格く

(歟) 新古今
いそのかみふるの山をも花さいくへの霞の志て隔　新古今
是もいくと歟の詞よりかかりて波と留りし下へあるを二字へて呼ことく

○切る歟　猿丸の山かげいづこ網代守　正義

是は網代守さる丸の山かげいづこと切ぞり切る歟と歟の意の下へつづくと見合てんなるべし

|こそ十九|

されどこそ荒るる軒は霜の宿　十九

是はこそよりかかりて宿と留りける下へあれと二字入て宿とて余を残て呼ことを十九の格く又こそてまて切るといふことは例なし　こそと留りける時も十九二十の格あり

|こそ留十九|

玉祭飯は稲より蓮にこそ　十九　作者不知

是はこそと留りける下へもれと二字入てれとて余をは残合て呼ことにて十九の格く

拾遺
あしびきの山べに年は経ぬれども心は雲の上にのみこそ　アリ

是もこそと留りける下へあれと二字入て　れとし

てにをはに照合て心得べし
難句もこそとあるハいかにも難き所なれど
こそとあるべきをこそと云ハこそ詞を入て心得
こそもおさまれバこそに詞は首尾といふ格の第一也
いひ残して余情を残しとあり

●帆こそは松のあらしより見ゆれ

とあれども是ハ御あきらかにすれと入て心得
いふハ此てあるも一度ひとつとあり詞の首尾といふ格
にあるハとりなきこといひおくことぞとあり
と云難句乃ことのあるなり

●田子の浦よりちかきてにかなひこそ

此こその下へ詞を入て心得んにハ至ハふかしと添んや
又赤人ハよくよまれしといふや詞の玉の緒に

●十五百首 荒もなし人あもちぬ味の戸もさびし寿の久しかりふてこそ
これらいふも乃をさぐる事く

と云り是ハこその下へ寄しかれど四字入て心得ること
こまかなる事ぞしへてこそとあるりうるも二字一字近
の余情を限るこちらん格べし

外十九

此暮も又くり返し出すし来 ○イ ○ア 能因

是ハ此よりかくりけれバ外のまりく来とあるりける
下へいふと二字入てふとてにをはに照合て心得ること
まて十九の格く

(外下) 續古今

明石がたを見し浦をうけて見るらんせバ霧乃上も沖は白波 ○ア ○リ

是も此よりかかりけれバ外のまりく波とあ
りける下へあるりと二字入て心得之

の十九

あかねさす葉月の日の光 ○十 ○九 土御

是ハのよりかかりて光とあるる下へあるりと二字入て
心得るに十九の格く

(の)古今

梅が花あらぬ色香もむかしにて主なき宿にあれし月影

是も「の」よりかゝりて月とかゝりしたる下へあるを二字入て留めたる下をむすび詞にてむすぶのハつよきのみハあらぬ所ぞといふべきやうなる所をのといへると又かといふべきやうなる所をのといへるのをつゞく者の歌ハ理の外をつなぐ 松の風 月の世 なごののを光ののといふ 又なハぞ のや 類でこそと留めることにつゞくことあるをも時ハ留ハかゝる格ぞのや「類でこそ」ハきびしき格なれバおかしき格の方のむすび詞としてむすぶ定りなり 又のもかゝる格なれバ格をあげつゞけてむすぶことなきなまゝつゞく格をあげつゞけてむすぶこと変格といふ変格とハ

古今 玉つさみなつらぬ花のちらん枕して忘ること月の春くなり

是ハのかゝりなれバあると結ぶ格なれども それにかゝりてなとむすぶべきよりもゆとむすべるハ志るべき歯よく聞ゆる時ハ此ごとくゆともむすぶべきまでに詞のうへにものかゝる格にハ変格ありとしるべし 此変格に同じ格の例句

変格

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮　はせを

是に「の」かゝりなれども「秋の暮」枯えたるかゝりてのとまりけりとむすびて切る所ハ「淋しさ」げけり遠方の遠里詩人といふ此発句ハ初めハ「枯えさまなしきの」とありしを秋の暮といふ句と志るをある夜の弟子李吟其角桃青三人よりして「枯枝にとまりたり」とかはりきよりと詞をさだめてあしハよろしきも人といふども「淋しさげゆく」といふ人ハあるべしとて「淋しさげゆく」遠方の遠里と云葉をつゞめたるといひつくぬ是よりして正風のおこれるこの発句ハ西行上人のうたに

山畑のそばの花よみる鵯乃友よぶ声もさびしき夕暮

これも此所までにてよろし

外十九

五月雨に家ふりすてゝ蛞蝓　凡兆

是ハてよりなりされバ外の分にてめでおりなり なりさ
るゆへなぶと二字入てぶとて舟をこえ此合てゆゑとして
十九の格之外詞を入て字とこの所ハあり ある あらん
なども入て字足あるがゆへ多くの句ハ詞をうごかして
いひたるなり 猶 なぶ こる 却る ふく いく あり
何をも入て字ゆゑあるが相違し 動きを施すと知るべし
格ハ前の例を思ほし見ざれバ一の句ハ又二の句ハ
との句づめあなどりて留りたるあれバよくよく思ふべし

万葉
桜花今ぞ盛と人ハいへど我ハさぶしも君とし無れバ

是ハさぶしもと留る句の中ハ下へつゞきたり 是ホハ今が
べられハ広くならんもさるをとも見て下へつゞきたり

盛といふ字へあるると二字ゑて字あるとあるをしてよ
あるといふ詞をばへふくまでて下へつゞけて見
とし且も猶もしれバさぶしもと留りたりさ
ぶしもハさびしくもハらく添ふるのてをも
とあし

千載
見る人もなき山里の桜花ほかの散りなん後ぞ咲かまし

や
いせ物語
是や此天の羽衣うべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

是ハ二の句づめにてやよりかかりて衣と留りたる
これらも衣の下へあらんと三字入て字あるとこ
の意ハ是やこれ天の羽衣なるらんと衣をかへ
してそ君が御けしとよひなりけれと云ふなり

後撰
いろ東路バかへりぬるなきぬ縄くるしやく人忘れずの

是ハいろと歎よりかかりて縄と留りたる中へある
と二字入て字あるえ 是ホハ下よりうらへくるし
人忘れずのこんくるしやと歎息のやすて切るなるべし

(數) 新古今
ちりかゝる紅葉ながれぬ大井川いづれゐせきの霜の柵(しがらみ)
是もいづれと數よりかゝりて柵と留りたる所へ
なにゝと云三字入て心得べし

(こそ) 源氏藤裏葉
なれこそは岩もるあるじ見し人のゆくへはしるや宿のましみづ
是ハこそよりかゝりて二の句つゞきて主と留りたる
下へなれと二字入て心得べし 上ハ
なれこそハ岩守あるじなれ見し人乃行
来ハしるやしらずやと切たり

(こそ) 忠度百首
さもこそハ都恋しき旅ならめいひながらも露も涙もある袖のうへかな
是ハこそのむすび詞をとゞ文字にかへるといふ詞
をふくませたる語也是も右の格と同じ事なり
これはむすび詞をふくめたる格と心得べし

(外) 新古今
くづれへの籬井の宮ハ荒びてよるぞひさしき浦の松風
是ハ何の字よりかゝりれば外のかゝりにて風と
留りたる中へなりと二字入て心得べし

(外) 拾遺
あら玉の年立かへるあしたより待たるゝ物ハ鶯の声
是もたゞよりかゝりて外のかゝりにて声と留りたる
下へなりと二字入て心得べし

(外) 金葉
なほ人といふも理(ことわり)さよ中々人のこゝろをとりに来れば
是もたゞよりかゝりれば外のかゝりにて理と
留りたる下へなりと二字入て心得べし 理よ
中々人の心をとりに来れば盗人といふも理
なりと留るべき此歌此格にて綴る歌句ハ

外十九

是ハくと咲花の吉野山　貞室

これらも句の中にて切れる也 咲花のといつゞ
かざる所を心をつくべし 是もちゑして花の
吉野山これハくと咲と留るを見て十九の格なり
これハとよりかゝりて咲ハ外のかゝりにて咲と留りたる
下へなりと二字入てりとてよむ事ハ此格也

此外くさ〳〵は格に就てをらて叢句に出を引合發
句にあるて其本歌の限りを云ざされは其おぼろへて
かはるべし 抑此文はこのよく見ずしおへるべ
ろ一重ろうには何しるをさがしま和尚ひのとも分るにて尺
おもうてくきれば見けのとまく取しに相好しそうとい
く数もいくほどはるさし中れ思ひ申あひそ

饒舌録上巻目録

ぞのや疑ひは例 十八の表
ぞはむすび辞 十九の裏
ぞは部 二十二の表
のは部 二十一の裏
やは部 三十九の表
なは部 五十二の裏
がは部 五十五の表
疑詞は部 六十七の表

ぞのや疑辞例

ぞ ハ下にむすび詞あるぞをいふ

の ハつね詞のにあるはぞといふべきやうなれど又がといふべきやうなれどをのこるのをいふ又句づめになるのをもいふあり

や ハ下にむすび詞のなるうたがひのやをいふ

疑 ハいつ いづて いづれ いか いかで いく なにほど なぞ だれ たが たぞ などの疑ひうたがひの詞を一つに疑といひて下にむすび辞ある疑詞をいふなり

○疑詞の下に ぞ文字 も文字 又ハぞもとあるハすべて下むすびにかゝればたゞ云紫ありとみるべし一之中に

疑の下にてとまりても又下に疑のことのつきて下に
むすび詞のあるもこれかれあれども疑詞の下にもとなる
ハすべて下のむすびに不及ただ詞なりと心得べし

いくよしも　たれも　いつとても　たがいろよりも　いつも
いく千代も　いくへも　いく日も　なにも　いづくにも
いづくも　たれが方も　いづちよりも　何れの日も　なにでも
いくらさかる山路ありとも　たれとても

此類ハ疑詞の下に文字あるハただ詞にて下のむすびに
かかハらず

○呼に他といふ疑詞もただ云棄なれハ下のむすびに
不及逃疑さへ　二ノい　一ノ八

古今
みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに
是ハ人にむかひて他の人故にハみだれそめじといふ他と

さしもいふる疑詞あり

金葉
長濱のまさごの数もなにならずつきせず見ゆる君が御代かな「けふハのみ言之」

是ハまさごの数ハ物の数にもあらずといふ言にあれを
他をいふ疑ハ比ごとく疑ひ詞なから他のなき疑
詞に　たれ　いづく　などいへハただ詞なれバ下の
むすびに不及されバ下のむすびのや　ぞ　こそ　に
かかはりてもさのみ下に係ともてといハも
なきなり

○疑にいかでといふに［ナニトゾ］といふをあるもただ云棄にて下のむす
びに不及又いかでに［ドウシテ］といふをあるハ下にむすひ詞を例と
○疑にいかにといかにも　いかにといふに［イツカク］
［イツソマニヤラ］といふをあるも云棄なれバ下のむすびにかかハらう
にされども下にうたひのやをおくべきやうなる所ハ　のといふを
も外ぞこそにあるなりてもさのみ下に係ともいへる也

發句ハ云続けしかき通りおもき格の詞のきれる事ハ能々
くわしくなし

○疑ひ詞ハいづらといふハまでゝ下ハむすびハ不及ニ事切るまで イツレカ イツレゾ といふまでにてひあふて下ハむすび
なし

○此次より ぞのや疑ホの詞乃本とおとそのこる發句ハ歌を引
合て見る先ひめハ ぞのや疑ホのむすび詞を凡ハ集て見るべけれバ

㊅此下にかゝるハ ぞのや疑も外のてりはむすびも同じ一ッ詞にて知るべし

ぞのや疑ホはむすび詞

㊅く

ふく ひく こぐ せく きく かく ふく さく ゆく
たく やく おく とぐ そぐ のぞく さわぐ なげく
いそぐ たく あざむく
此詞の下をるといふそれぬ ぐ此のくハぞのや
疑外よりかゝる時もむすび詞ハ同じ一ッ詞なる格あり

㊅を

こそされまでなれ やどるて まけれ わびれ
うきれ かさねて そへれ 生めて のぼるて ちるれ こゑて
此詞の下をるといふそれぬ 此詞の終ハ
ぞのや疑外よりかゝる時もむすび詞ハ同じ一ッ詞なる格之

㊅つ

まつ もつ かつ うつ もつ こぼつ そだつ
此詞の下をるといふそれぬつをいふ此詞のつハ
ぞのや疑外よりかゝる時もむすび詞ハ同じ一ッ詞なる格之

ぬ

しぬ そぬ きるぬ いぬ かさぬ ちぬ せぬ こぬ
不ぬハつまハつゞく格なれどぞのや疑ホよりかゝる
時ハむすびとなりて切るべし

㊅ふ

いふ さふ おふ あふ いふ かふ すふ はふ
あそぶ むすぶ さけぶ いそぶ あらふ うらふ まがふ ならふ
かよふ うつふ
此詞の下をるといふそれぬふを云此詞のふハぞのや
疑外よりかゝる時もむすび詞ハ同じ一ッ詞なる格之

六 む

きむ つむ すゞむ すむ いむ たゆむ きざむ
かこむ ふくむ くむ しやむ かなしむ をしむ
たのしむ

又

んらん けん 韻ん てん

是等のむ文字も第二同じくそのや轉がよりかゝる
時もむすび詞ハ同じ一ツ詞之ある人を詞ハ上より轉ハ
詞なくて六ヶ敷といへれど志らんれてハせまし二を
の外ハいづれのむすびもなとくんぬべし

又

語ぐふこまるんハそのや轉ハのむすびにハなんれ外のかり殊之

語ぐふこのなんハ

歌 をぐら山ミねのもみぢ葉心あらバ今ひとたびのみゆきまたなん（ツテラ欲）
のとあれバ今ひとたびのみゆきをつぎてこれなる
つまりのこなんハ二ツあり

四子ノなん 又ベキ 又べき此之

つまのなんハそのや轉ハ於かりたる時もむすびと

なうえ

語ぐふこの なん 里語ハ テクレ テクレヨ

此語ぐふこの韻んの上此かりハおかよりかゝる時のこえ
そ。此このなんハむすび辭にて下をむすぶ格之

六 る

える 志る ちる ふる てる いる のる やる よる やる ちぎる
くする かゝる 眺る 増る つゝる とる たぎる
染る 祈る さぐる よぎる まぐる もる 光る 得る 志める
きる こひやる くぐる うさなる 成る
此数ひの句とハいそれぬ句をいふ此数ひの句ハぞ
のや轉外よりかゝる時もむすび詞ハ同じ一ツ詞なる趣

る

くる きる ふる（絶） つゝる めぐる（昇） むる ゆる ゐる ける なる ある
たる せる へる れる める をる
此るハぞのや轉ハのむすびの時のてきるなり
つまはつゞく格なり

○らしといふ詞ハすべてなる格の下に有りてそこを疑ふよしむ
こゝろなり
○ぞ や 哉 こそ ハおもき格 外ハかろき格なればこそ来る時ハ
おもき格のむすび詞にてむすぶ也 おもき格のむすび詞にて
むすぶとハ

後撰
浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき
是おハなどて疑ひ詞との二かさなりたれどもの ハ かろき格
なれハ是ハ疑ひ詞のむすびにあるなり

後撰
吹風のさそふ物とハ知りながらちりぬる花のしひて恋しき
此時ハ外ハかろき格 の ハ外よりハおもき格なれハてより
かゝりくるやうなる時も の ハむすびに しき とむすぶ
定りなる故なり 是にてよくなぞらへて ぞ の や 哉 こそ
本と外とかさなる時の格をしるべし
○此次よりぞ の や 哉 に結句結語を入れて

治定 き

よき　かろき　なき　べき　ふかき　あさき　つらき　しげき
安き　たやき　遠き　もくなき　おなき　めでたき　ときろろき
おかき　うき　おもしろき
恋しき　たのしき　をしき　まびしき　さびしき　くるめき
恋しき　くるしき　なしき　うれしき
此おひ治定のきにてむすぶ ぞ の や 哉 にむすびに
しきといふる辞ハうなしきとむすぶ格也
外のこり語時ハしきといふる詞もうれし。恋し。
かなしと理立のしにてむすぶ定りと

過去 し

わしてし　てし　見し　いし　見えし　消えし　いひし
ありし　ざりし　なりし　まぎし　ちりし　ゆりし
せし
此おひ過去のしにてむすぶ過去詞しハ出にハつゞく
格なり

まし ハ んかしのこゝろ
らし ハ らんかしの心
けらし ハ けるかしのこゝろ
此三ツハいづれのむすびにもなる詞なり

ぞ留め

くきつぬふむる　さし

六 けくきつふむかハ子に切れもしつきもき

六 く

廻廊に汐こむ小れハ麻ぞなく　東堂

是ハぞよりかゝりてくと切る

六 ぐ

風よりも子供ぞさはぐ新の栗　宗久

是ハ下にてよこもとに新の栗風よりも子供ぞさはぐと きれる

古今

よるこもになかれてぞゆくなきなら川

是ハなきなら川きもおもぬになしなりけり

てぞゆくと切るまでに あるは我のなる

六 き

つらゝし茶の波音に月ぞさえ　子阿

是ハぞよりかゝりてきる切る 是ホハ下をきるといふれぬ

おそくぞのや疑ありかる時ハきるといふ詞ハきう

とむすぶ捨てくるふるゆるを又つるゆる かども同じ

千載

すがはらのある山下にかゝる夜ハ月さへ笑れハありをぞさし

六 つ

吹きてる里ぞよりぞ雑子立つ　湖舟

拾遺

天の川ちる波のうちかゝつて秋のあぬらればるぞまつ

不ぬ

風寒し小鏡ハ兜の音ぞせぬ　巻佐

上より ぞのや疑ありてかゝる時ハ不ノぬまでむすぶ捨

上より 同て きまりる時ハ 初とむすぶ 捨

上より 銘のきられきハ ぞ又ドと結ぶ捨

古今

桜花ちりぬともおもほえぬ人のみぞ風も吹きくぬ

六 ふ

古園千本の梅れ香ぞ匂り　負山

是ハぞよりかゝりてふとむすびて切る

古今

まちきぬと人ハいぐくひものなるぬるぎりかしもぞぶ

六 む

空にちれ霰ぞ淡かむ雪の花　　宗祇

是ハ雪の花空にちれかしあられぞつもらむと切たり

古今
我庵ハ都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人ハいふなり

是ハ世をうぢ山と人ハいふなり我庵ハ都のたつみ
しかぞすむと切たる也

六 むん

今ぞみん淡雲くもる月に花　　宗英

是ハ淡雲くもる月に花今ぞみんと切たり

拾遺
うごきなき巌のはても君ぞみんをとめの袖のなでつくすまで

是も少女の袖のなでつくすまでうごきなき巌の
はても君ぞみんと切たり

六 むん

郭公なきてぞ来らん夏の雨　　玄哉

是も夏の雨ほとゝぎすなきてぞ来らんと切たり
此らんハつねのらんと 又べき 又べし のごとく

新千載
恋しさハ都のまつにくらべてもひまのゆくてぞきこゆらん都ハなくとも

是ハ四の句又の句出仰までかきあとして 都ハ
なくともなきてぞとふらんと留る字を又の句にハ
ぞよりかゝりてらんとまでらんけんなどゝ
留りたるハいくらくもありけれバ證哥にて見るべし

古今
春日野に若菜つみつゝ万代をいはふ心ハ神ぞしるらん

十六百番
ひきかへん千代のためしぞ小松原をしほの山もいざひきかへん

これらハ二の句にあまるそのひきかへんハけん
返しかけり是ハさかさまにてぞ ぞのや 哉
こそ 詞おもき格の詞 乃てにをはとぶりてある
所ハまんをつくべし　そこの留る所を切たる
留りたるもみえても留る所をもまなび詞の格
ありとんおへし又その流れまんハ発句二
ハ見こざれバ證哥にて見るべし

天狗
はれ〳〵となかむる方のあかゞらん人なん我をおもふはなす
是ハぞといふべきやうれ形をあんじくりひぞ
のこゝのぶんハ下にむすび詞ありこれらハぶと
むすびてぞと受て下へつゞきて上へかへりて
つれ〳〵に何かあるぶ是れあかるらんと留る事と
此ぞのこゝれなんハ第二ハいとしく〳〵まれく是は
文章におほく有事なんし

古今序
○いつはりふくて臥といへる事ん是にハうかふべき
○非常ハうくれるところまんなき
○そのもしめを思へハうるゞく形んあへぬ 不ノぬ
○赤人ハ人まろかしもにたゝんことかたくなんありける
○つゆきらうげ此世にうまれて此時にあへるを
あんよ得てこびぬる
此ぞ〳〵を形なんといへるハぞの結格のむすび詞まで留まり

る
夕涼よくぞ男に生れける　其角
此句下句にハけりとあれバ写なを用ふ
古今
冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞふりける
● とまの右ざる見る
● さふれ月影みきくぞ恨あれ
是ハぞよりかゝりてれと留まり是ハひがる事ん
合璧
ことぞよ流ふ見えつれど桜花れて八似たる文字かゝれり
これハ下へつゞくるにてもむすび詞をくりかへし留る
物まで言ことぞよそゝるいつるどといへそれぞれ
バるをれるをさくらして ぞと受て下へつゞけ
るり是ハ下へつゞくる時のこゝれてするて事べての
ちうとにハおしびとん称べし

る
橘の香ぞ残りぬる去年の風　瑯夕
是ハおしれ里橘の香ぞ残りぬると切るり

古今
秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

●このそざる某句ハ
●ちるたびに見えぞ捨ひぬけし此等　但六・私
是ハぞまでかゝる時ハぬるとむすぶべきをぬるをぬとむすびしるハとゝのまだ掛のかゝりにハぬ
又つとむすびたる変格なれども　ぞ　かゝりのやま
にハ変格なし

る

書路日ハ昨のこ笠ぞかゝりなる　　羽笠

古今
見てこそものひらけぬるを木の花とよみてこそ書ぞかゝりける

る

夕涼おもひぞいづる旅のそさ　　洞月
是ハ夕もぞみ旅のそさおもひぞいづると切たり

拾遺
忘れしの川とぞつひになぞれいづるいかでかは思ふ人のあとこそに忘れしの川
是ハいかでかおかふ人のあとこそ忘れずるといぞつひにあなれいづるとなるくもいかなれいづる
也宇がかりおいても上にてもまでさがふにとを知るべし

上よりぞのや数までかゝる時ハつる　ぬる　とむすぶ格
上より外までかゝる時ハ　つ　ぬ　とむすぶ格也

る

千載
子城連でもぞこそ寄る鵜飼舟　　芝山
是もうかひ舟子をつれてこそ見せなるとも切たり
山さくら雪に残りてあくる方りかをバつれき花ろく風ぞ志るまきしる

る

あれ葉ちる音ぞ吹ゆる落月夜　　莫山
是も落月夜あのおちる音ぞ吹ゆると切たり

後撰
秋風のさきをあれこる雁がねハ雲井なるかなすぎ吹ゆ
上より外のかゝり此時ハ吹ゆと留る格也

金葉
雪とくしもまづひもときし卯の花ハ所れバ月の気とぞみゆ
叶ゆと留ることを　くまつぬふむるを一
字上に交てくみゆ　きえみゆ　ろみゆ　など
いふ人あれども志かる故ていさがふなりあり

まべて 光ゆ 咲ゆ 見ゆ と留りたる所に
んきとらけてよるべし ただ上のかかりに志たがふやを
ころほべし

[る]

鐘ほ小寺で志らるる其木立　拾栗

是ハ其木立なる小寺で志らるると切たり その
や数木まで見る時ハ有と いふる何ハ有しとむを
ぶ格く上よりかのかかり時ハ有しといふる詞も見ゆる
なかる 志らる おもちる 見ゆる いふる まうる ともまぶ
定りて又あかるといふねバ一字たらぬる時ハおかれつ
見ゆれつ 志られつ おもちれつ 見られつ なかしいふなり
れづれもなるべし

古今 飛の川花のみをまてたやられバ光りとぶめ月ぞあかるる

六 [る]

釣柿の肴でうるる小時雨　其角

是ハ小志ぐれつり柿の肴でうるると切たり

古今 つくばねの此もとかげに立ちよるまその深山の陰をこひて

是ハまその深山のかげをこひつ ばくだるの
木のもとで立ちよるとくりて留るを
ありけつハてまかよふつくまべて句の中
有るおもつハおもくてまかよふつと
おぐりといふ志るかよふつてあるあくつが
づみ給ふ志るせり

[き]

引蛇のまうけでさむき雪風　誠人

是も雪のくれ引蛇のまうけで寒きと切たり

[き]

若菜より七夕草で見えてよき　荷兮

[き]

佛より神ぞたふとき今朝の春　京 とめ

是ハけさの春よりけふ神ぞたふときと切たり
上より卯までくる時ハ現在のしまでもあぶ格く

古今 ありふくちるぞめでつる花桜花ありて世中まてのかなれば

是ハさくら花ありてよの中をそのうれればのどかならぞめでたきと切るごとく

現在 しき

寒けれど二人旅寝ぞたのもしき　はせを

現在 しき

志ら菊のちらぬぞ咲し口をしき　昌隠

現在 しき

郭公なく〳〵飛ぞいそがしき　はせを

上よりぞの字や哉ホかかる時ハしきといひきる詞ハしきとむすぶ格也是ハ八も現在にも現在也

● とめのそえざるハ

● 是ハ鐘のつかぬぞうれし月の空

是ハぞこそりりて現在のしまでむすびるごとくのそざるも是ハ考をそでまくらし語りつゝ

古今

春日の光りに向ひる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

過去 し

志をれ伏萩吹風ぞあつかりし　野堂

過去のしハつゞく格なれども上よりぞの字や哉ホ又らでかかる時ハむすびとなりて切る也

古今

みどりなる一つ草とぞ春ハ見し秋ハ色々の花にぞありける

是ハぞ二ツあり上之ハ下のけるまで切るごとく

らし

妻こもる庵ぞ秋むらし村もみぢ　本阿

けらしといふむすび詞ハらんらしのごとく是ハ切る又思ふ妻ありて庵ぞ秋むらしと切るなり

古今

吉川よりもみぢ葉流るおくの山の雪げの水ぞ今まさるらし

らしましけらしハいづれのむすびもしもあると心得べし委しくハいろはにあり

けらし

菅笠の白きぞ蓑ハ寒けらし　尚致

新勅
志ぐれつゝ色まさりゆく筆よりも人のこゝろぞかはりはてぬる

是ハ下に字をそへたる上ぞの也数あまたあるを略の序しハ 如此ノ の意あるが故なり

是迄ぞおさまり此むすび詞を證歌證句にてみるごとくなれ
ばべし ぞよりかゝりておしとむすびたる歌句見あたらず
猶だいづれもちかきことよりてハ ましともむすぶべし
ひ尓達波ハ此限りあらざるものなりけれども ぞ
むすび詞ハ是まゝくおさまり見えたるぞよりかゝりたり
おしと留りたる歌を

拾遺
宇治山のもみぢを見ずば長月の過行日をも志らずぞあらまし

○是より下ハぞを動ぬ詞にてむすびたる十九の格を
外くさ〱のぞをいふなり

そ
十九の格
是ハ動ぬ詞にて留りたるをいふ

十九
まちわびて鳴ぞ清この時鳥　尚敦

是ハぞよりかゝりて動ぬ詞にて鄭重と留りたる
下へあると二字入てみるとて心えたる證歌句の詞也
是十九の格く此格ハぞのかゝりにハまく此しへ詞歌
ハ九例の中に出せり見合てんみるべし

いひかけてむすぶ格

いひかけ
月ぞりむかしもかくぞ須磨の浦　典八立

是ハ月だ〱りむかしもかくぞすむらんといふべき
を須磨の浦へいひかけてとめたり

新古
うつろふハ人の心か秋なれば今ハよそにぞきくもの上乃露

是ハ今ハよそにぞきくとむすぶべきを
露へいひかけてとめたり

切るゝぞ

切るゝぞハ上よりかゝりてきるゝ所にてきるゝぞ
の留りにおくぞにてむすびもなくてきるゝぞ
ぞといひ捨るものなり

切ぞ
芳野にて櫻見せうぞ檜木笠　はせを
是ハ芳野の木笠よしのにてさくら見せうぞと切りし事

切ぞ
月の時ぞもちむかふぞおちつらむけ　蓼太
是も月のときこそもちむかふぞと切りし事

切ぞ
神宮山をどれバ芥の花ぞ大根引　雅彼
是も大根引ちぬすきをとれバ芥の花ぞと切りし事

切ぞ
うつりし春ぞ咲かずれ　市山
是も時をうつりしものんぞと切りし事

切ぞ
蛤のふたみに別れ行秋ぞ　はせを
千哉
かゝりてもよろしけれどもぞハかし其のころおほはれるなるべきもんとハ
是ハふし柴のころぞなりあるあぶきせんとハる

てより思ひしことぞと切りし事

うたがひてとひかくるぞ
是ハ上ニ疑言ありて下にぞといふを云

とひかくるぞ
何事ぞ花見る人の長刀　去来
是ハ花見る人のもち給ふは何ものぞと切りし事

とひかくるぞ
初霧なにとおよぐぞ船の中　其角
是ハ舟の中にあるをなにとおよぐぞと切りし事

とひかくるぞ
乾敷傘かしていくほどぞ　英一蝶 暁雲
是ハ何をかしていくほどぞと切りし事

とひかくるぞ
百ありていくらが椀ぞ膳のうし　木巴
是ハ膳の上ニ百ありていくらが椀ぞと問ひし事

とひかくるぞ
どちらから流るゝぞ麻にこし行　蓼太
是ハ麻子を手にとりどちらから流るゝぞと切りし事

是亦ハ句の中にて切たりいとめづらしまべて切らぬ句つめなるがおほし

【とめるぞ】

簑虫秋いつ入るるぞ陶器　昌碧

是ハ入り込ミのむしいつ入るるぞと切りてことくば句中にていつ入るるやとおれどもとひるやと云ハ例なしこれらハ誤りあるべし古き写本にいつ入るるぞとありて正し発句秋例ハとりがたし其の例をとるべし

【とめるぞ】

荊萱も茂さをまねくぞ乱て　樂飢

是ハ乱るやうこぶれ何を招くぞと切りてことば「て」ハてにをはふてくる発句ハ上に切る所ありて下に「て」といへるハ多くハ「て」に留ふ「て」あだらといふ

ようふてくる

【とひるぞ】

かづらきの神ハいづまぞ東乃雛　其角

是も葛の神ハいづれぞと切りてことば此てくいく日ぞいつぞしらずけてはつるも

新古今

武士よまでこてくハんこふきくハいつぞなりふくみよ秋嵐ぞ

拾遺

たれきけとなく鶯ぞ我宿の尾花がもとをすぎがてにして

是ハ色ちもの尾花がもとをすぎがてにしてたれきけとなくらんぞと切りてことば此同じぞひてまひくるぞハ詠歌の如く詞をへだててもいひ入れぞいふぞとつげてもいふなり

秋遠

いつありし時ぞや夜にこしことハそれさへ面ぞ忘られぬかれ

是ハ夜にこしことハそれさへこそ忘られぬかれいつありし時ぞやと問かけこれもハ下に疑息のやをそへたり

の之部　く　も　つ　ぬ（不）　ふ　む　る　き（現在）　し（過去）

（六）く　春の日和よなれバ風のふく　宗因

是ハのよりかゝりて「く」とむすびて切り「の」ハ此ごとし「ぞ」といふべきやうなる所を「の」といへるをいふ又句つめよんだるをもいふく

（六）も　古今　春たてハ花とやみらん白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

おきくれ心ごゝろにのきもる　仙☐

是ハかきつゞくおきくのこゝろごゝろぞと切る是☐るつあよりかゝりかり

（六）つ　後撰　人しれぬんやうにてあれぬらんおもしてのおもかけまつ

渡守よべぞそゞろに睦乃ころ　定香

これらハ「が」といふべきやうなる所を「の」といへり

不ぬ　ちぐれ弥バ又松風の声もおこりぬ　小枝

是ハのよりかゝりて不ぬとむすびて切る上ゟ外のかゝりなけれバ是又ぬとむすぶ格也

（六）ふ　古今　みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

京紅葉去年の月とふ備中守　文帥

是ハ備中守京つくしをその月とふと切る

（六）むん　千載　夕霧や秋のあはれをこめつらん分入袖に露のおきそふ

鳥羽殿の寺あ見つらん節分　李吟

是もほかにきれ字なごのさきめみえて「らん」と切るなり又此歌の詞ハ上にてうたひのや又疑詞なくてハその詞まていとまぶたれどもいつれども「ん」の切れもつきもある格なれバいづれのむすびにもあるとみるべしこゝそよかゝる時ハらんハらめせんハせめけんハけめなんと

なめとむすぶんは字むすび詞の形なれど又こゝにいふ

⑥ むん　朝顔の苔なぞ見ん蔦青葉　田上尼

是ハ蔦青葉あさ顔のつるなぞへ見んと切なり

⑥ むん　子やなかん其子の母も蚊のくはん　嵐蘭

⑥ むん　麦わらの家してやらん雨蛙　知月

是ハ雨蛙むぎわらの家してやらんと切なり　是等ハ一の句つゞきより切たり　のハすこしまはりてむすびて切るとむすびのおきやうなるとの差別よく心をつくべし

大和物語
山里にこれをとゞめて別路の青のまゝしくなるらん

る　どこで見ても地に這ふ蟲の哀なる　越水

此るとこしいふ詞ハ疑のこゝろであれどもすべて疑詞の下にて文字あるとも文字あるとハいへど詞あればぞやいへる

千載
かゝることかさなりてもさかしれば下のむすびにかゝりぬれば

交城外の萩やを萩のつまなりん花咲しより声のいろなる

⑥ る　清くしく握ﾄ来の子の鐘なる　去来

古今
これのこそ露れぬきてよるからかし山のもみぢのあはれかつちる

のハぞやぞ疑てそあまくしぶればかくて格ゆゑ格なまぎれてむすぶてあまきにあしび多なるも

変格なり

変格　梅咲て屋の咲せる迄より梅の花　吐月

是ハ梅の花梅咲のさ各まぎるゝりとてむすびて切なり

変格　井ある水のぬるみてめぐる堀の月　千牛

是も堀の月井の水ぬるくそめぐりと切る是ハこゝてよりて中しくに捨るとむすぶよりりと

いるが中よそきるり　ぞとこそとや又ハ変格なし

新古今 変格 むすぶ手に影みだれゆく山の井の あかでも月のかたぶきにけり

留 き

ぎやうずいの捨所なき虫の声　鬼貫

是ハ虫の声行水の捨所なきと切り

古今 ひとりして物をおもへバ秋の田乃稲葉のそよといふ人のなき

のかゝるハさとむすぶ変格あり

変格

梅一りん一りん程のあたゝかさ　嵐雪

古今 変格 秋萩をしがらみふせて鳴鹿の目にハ見えずて音のさやけさ

盡 し

人音とおもへバ梅の風ありし　無名尼

まし

文こがまへつひ菜のゆらの雪まし　野水

のかゝりハ沈有てもちゐし歌も同じのよりかゝりて

らしともまびらる変りなしバ沈有のと見えて

建保四年百首 夕よめる神辺の蒼あくし袖うけて此将の人乃かざしをるらし

の 十九乃格

十九

とぶ沢に寐て郷も見えの年忘　支考

是ハのよりかゝりて年忘と留りたる下へまでと二字入てかとてハをも文字合て中をまとめて十九の格く

十九

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁　はせを

是ハ文書に乙州が江戸へおもむくとてとありて餞別の句なれバ梅より若菜まりこ宿のとろゝ汁よきとよまれ旅にハよきれからぞといふことをふくませたり是ものよりかゝりれバとろゝ汁と留りたる下へよきと二字入て見立きとしてかをも文字合て中をまて十九の格く

十九

當帰より哀ハ塚のすみれ草　はせを

是ハのよりかゝりて草と留りたる下へあると二字入て中をまとめて十九乃格く混るハ凡例の中に見えれバ爰に志るさず

いひかけそへものゝ格

いひかけ

雪月花見るも僧の車坂　空山

是ハ花見る僧のくるといひかけたるを車坂へいひかけそへたり

のゝ字留発句

いとはれて秋に逢ぬる濡柿の　宗古

あはれさのかた

是ハ濡柿のいとはれて秋にへぬるかと我の上のかなしみをいへり

老の身にをしくもあるか散花の　閑月

是も老の身にちる花のをしくもあるかなといへり

古今
吹からのふく山風をさむみ秋萩のちりゆく人のこゝろの
是ハふきまよふ山風をさむみ秋萩のごとく人のこゝろも
うつりかはると我の上のかなしみをいへり

好忠集
みぢかひせし鴬のなきよりかなしくつきぬも有られ淀のまこもの
是もみぢかひせし鴬のなきよりかなしく淀のまこ
もの霞やそこしもあるらむと留りたり此格ハ上へかへる
して
むかしのならひに　むかしのならひのかなしみにこもの
まつる揚としるべし又むかしといふハ前ヘも
のがれまで別く分かち上のかりハまへで
外とのかりにて　分かちもいつも留る揚く
の留り此前ハいまだなし家との集にもなき
がおほくてあるハ口げん　同し　あはれ　なべくして
ことさて撰集に入たるハもとりかかりてかな
しくられるかれのこゝのかなしゝ源氏の君の
我も栄花物語の中にしで　そものゝ留り此前
あれども　いづれもことはるかならで留り
たり見合すべし

や之部

やハ下にむすび辞あるときハのやなり

くもつゆふむる　埜き　まし

⑥く

日和なや葵かざしく五月雨　　无也坊

是ハ日和やのさみやしまで詞を略きたるハ説あり　いはまくり万葉集に明けながやを明けやといひ又今もなほきて皆や
ハ日やをとりいひ又今もなほきて皆や
くいふもおほくされバ此句も五月雨日の用ゆや
あるひハかざしくと切りてきこし葵ハ日のかざしく
すゞひて葉をもて根をかくすものゝ
本草綱目草部　葵葉傾[テ]日[ニ]不[レ]使[レ]照[二]其根[一]とあり

⑥く

喰物や門売ありく冬の月　　立圃

是も冬の月くハ物売や門ありくと切り此句
かひのやも売やのきのやく此句ハ倒さしき故略言あり

古今
春霞たなびく山のさくら花うつろはんとや色かはりゆく

⑥も

春雨や蓬をのばす草の道　　无也坊

是ハ古今の春霞や蓬をのばすと切りてさゞひの
やのきをきこしんとなるが此やを此かなへて後の切る下
へ重て見る春雨ハよもぎ々をのばすとある時ハかなさゞひ
のきとんの安しされども句とハいふべきものを付とハいはれ

⑥も

浦風や巴をくづす村千鳥　　曽良

是も村千鳥浦風や巴を崩すと切り是木のやハ
あるもやハ本句をも是ども打かへひのやく前のごとく下
て村ちどり浦風ハ巴をくづすと見れバ句きも安く
やきし

⑥も

蓮や田をきりくずす馬の跡　　其堂

是も一句の跡つゞくやひや田をわくぞと切りたり
続猿蓑
浦風やともに波こす濱松の根にあらはれてなくちどり

是ハ上のくわひのやをまへむすびて下ハおの
かりみて切ふと留りたり

(六) つ

波やられ各々ほとく村ちどり　無名尼

是ハ各々よきらぐ村ちどる時毛へかつとおるて切り

(六) つ

霜やまつ味噌にふせてきりきさ　其角

是もみそにふせてきりしれ霜やまつと切り

六帖
あまのはら雲あらぬ月を山の端にあの里にハおそくいでけむ

不ぬ

明星や桜さだめぬ山かづら　其角

是も山かづら明星やさくらさだめぬと切り不のぬハ
つゝみ六つゞく格にれども其の切や疑ふよりくる時ハ切を
ひとなりて切りし

古今
あれ聞月のさまにあればまだもあれや旅をとぞしてこぬ

是ハくわひの切やまで下にむすび何あるまじと
けれやハれバにやのことの切やまで切にを略せり

此詞をおさへく例をあげてくわひのやを切やのこと
のやへの切の切やの字はやまるのさとん
おべし

(六) ぶ

花やおもふ雪もなき秋の月　宗祇

是もてふひくれぬ秋の月花をやおもふと切り

(六) ぶ

鳴瀧の名やせりあふ時鳥　如泉

是もほとゝぎす鳴瀧の名をやせりあふと切り

猿蓑
たのむ身に命はのぶる抱あふ八千年もかくて何らん

(六) む

水やのむ出團もちて涼しさに　伴自笑

是ハ出團もちて涼しさにうやのむと切り此句を詞の
首尾行中に合のやの格句に出して此やハ残句の切字
ともなるとあれどもくわひのやあれハ下にむすびを
ひ詞にて切りしたく此詞ひのくわひのやハ花やさく
浪やこそ　月やまつ　人やこぬ　名やおふ人やすむ

花やさん人やさる　あやうき　陀左　人やさし　去来
なとの類ひハうたがひのやをこめたる也疑ひ詞
また むすびふれバ切字なる也を切字にも
なるとてハひがごとなく初学ひのともがらまど
ふべきことなるぞ

⑥ む

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥　芭蕉

是ハ竹の奥にさゝらをなぐさむと切たる也
此やハ切字中のや乃やなり

後古今
誰れもなき妻をやたのむ秋風のおとにきけバ萩ハ鹿も鳴なり

是ハ秋風のおとにきけバ萩も鹿もなくなりつれも
なき妻をやたのむと切たる也すべて人く
むすびなるハ上より見ればうたがひのや又疑詞
よりうけて下へ切るハ手にをはより見てハ
くらんのやのぐ見らんの心こもりつらんの心
の心らんの心のぶむらんの心のむ見らん
又心のるゝあるがあるゆへ此くむすびふむるを

二重にしまれバくらむくらの心し加へ見れバ是
かとむを及ぜバかむの反くとつゞまる余ハ是
にあらずしてなくべし足ハなべての事
にハおしてそれよりてのなをいふなり

⑥ む

古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉

此句の心ハはいかいの言葉にて水の音を専
て何れ音なしん古池なく蛙とびこむ音もやある
んと推量して水の音ハ古池へや蛙とびこむと下より
よくらへして切たる是此のむと留りたるも
むんの心をむと也又へやの心をのべたる也の深さい

丈木
都ここしも旅路ぬらんかひハねるところや旅立ぬらん

是もへやの心をいふなりぬらんのむん

⑥ むん

あらち女の湯波や冷ん詩の声　嵐雪

是もかの詩なたらち女のまんばや冷んと切たり

⑥むん
梅子や蒔絵かく人たのむらん　拙人

是ハたがむすめやら似あれども蒔絵かく人を梅子やらむとたのむらんと見る時ハかぐひのやまて下をむすぶ詞そてむすぶ格あり

⑥むん
まごくと山やくれらん道桜　一髪

是ハあの桜まごくと山やくれらんと切ることく

⑥むん
二ツ三ツバいつさらひやせん今日の月　智月

是ハ今日の月二ツ三ツバいつさらひやせんと切ることく

⑥むん
今日よりや書附けさん笠の露　大臣哉

是ハ笠の露今日よりや書附けさんと切ることく

古今
七夕にかしつる糸のうちはへて年の尾長く恋やわたらん

同
鳴わたる雁の涙や落つらん物思ふ宿の萩の上の露

是ハ物思ふ宿の萩の上の露ハ鳴わたる雁の涙や落つらんと上へかへして見るべく

拾遺
たらちめハかゝれとてしもうば玉の我黒髪をなでずやありけん

古今
立田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦中やたえなん

同
ありとみて頼むぞかたき空蝉の世をばなしとや思ひなしてん

⑥る
たてゝ見ん霞やうつる大鏡　野水

是ハ大かゞみたてゝ見ん霞やうつると切るなり

拾遺
郭公来てハ鳴くやあきさかる都ハわすれのなしき都越

是ハ我ハ別れのなしき旅をほとゝぎす来てハ旅とや鳴らんと切ることく

いつらんの道
る
煤掃や忘れていづる鉢扣　闇指

是ハたちたゝきまち鉢をや忘れていづると切るかりけるハ忘れていづらんの心の多く此時ハらんの変るあれバちらん物まてみるべし

拾遺
筑波嶺のつもる世のあしづれ一年も君を忘れやへぐる

ぬらんのる

る

陽炎やとりつきかぬる雪の上　荷兮

是も雪の上ハかげろふもやとりつきかぬると切なり

ぬらんのる

る

八重桜や京も九日と咲きぬる　蒼虬

是ハあがむるやよ働かれども称ふるがひのや、あれバ下のぬるとよむまじ　何まで一上のやの言ハとけりたり是も上より一つるでかくや　をかはかて　此の留りなる下へ出て八重桜も京も九日と咲きぬるがとかれバふるがひのやときこえたし

なんのる

る

赤菊はよハ涼しきあぢや秋なる　其角

是ハらんの言のりるこ叶ひ事なり

● 赤菊はよや涼しさあぢを志つれり ●

とあれども疑のやよりかゝりてりと留りふるハ理ても不及　例あまたひかでとしても此の句正しられバ用ふ又疑のやの正所もたがへり　あまる語をうらむふよハあらく

涼しきあぢを推量して疑ふことあれバあぢやしとあく方正し　ふるハであるの言之式あの反たゞ之

源氏千句

うぐひすのむかしをこふるさへづりハ木づたふ花の色やかはれる

らんのる

る

なかれる雲や高くや吉野山　小枝

是ハ高き山あがれるる雲や志ぐると切なることく是ホの疑のや乃る所ハ西しくてれハらんのるふなむの反之

古今

霞たなびくのかざくなりゆくハ家やいぬ人や見ゆるる

疑のやをるとふるるハらんのるあるがいと暑うう是も人や見まうらんの言の有るこ

拾千戦

いざ又申や

る

来る峰や世るあがむる田植唄　正秀

是ハ田植うたをきこえ峰や世るあるがむると切なり

是ハあまち東おきそふ浅茅原おきそふ東の夜ふ東乃あきそふて

又中やらるむると留る言く叶所むまじひ付の格なるとなきハ隠所のこと見ゆ

月清集
吹風や空にしらるゝよしの山やまにかゝれる花の白雲ふく風　雪
是ハ芳野山やまにかゝれる花の白雲
やしらしられると云るこゝろ
千載
をみなへし浅香の露やたえそふらんたえれバいはふ神のしほりを
是ハをみなへしいはふ神のしほりをこれへしぶ
こゞろ露や露をそふると云るこゝろ
古今
みる月なきい我身をうしと志づねだやうれ笛であかれ星さゆくる
日
あしひきの山にしなは行ぞてや男子夜つつゆみぐて入しよる
拾遺
うちそしみんなをぞ引き古今の大和撫子色やうちきる
古今
春霞たつを見すてゝ行雁ハ花なき里にすみやならへる
源氏物語
はれあきらぬ世のつゆにぬれ行をまちえぬ人や人まことかる
月清集
いくらの井ハたえて久しき志ればかのうのじやおもひはやから
いくらの井ハやりにし之
<hr>
留き　山茱萸のくさしや宿き留主嵐　嵐雪
是ハみどりかゝし山ぐくのくさしやおかきを切なり
留き　名月や小国日和さゞめ形き　其角
是ハ何やの空のやみて名月さへや小国日和定めなる
べきの空のさきそ引るべきのつまりあるきさひきハ留る
なれり廿句を古人歌ゐよて切れや止いへり志ゝかいまど
定めぬしとせされバ上へハうつし其現在のきと現在
のに乃格ハ
上　ぞのや哉などる時ハ現在のきとてむすぶ格
上　外なり加る時ハ　現在のにて切るぶ格ニ
　　此本ハ写本にもきと有り　にをさゝぬし
おやかりかる歌意のやみて切るにと止れバ下ハ現在の
しるり
●　とこのそざるハ
●　秋や字しいまんや十年先祖がち　淡志ぶ

此句も弐人や文字二ツならずして雑じられども、いち合
ハ況なれバ字の訓く上のやハ数のやなれバ現在のきにふ
てむすぶべき格なるを現在のにてむすぶるハ上との
それ此句やを口合ひのやとのこゝろひてうたがひのやと
心得ぶる故かゝる誤りも有ぞかし　我やうき哉や
うたきゝるそきのことしとおゆるハ人もさとれる句と是ふ
まなざらしへて誤りあるゝのを知るべし

万葉
かくしてやなほや老なんみゆきふる大あらきのゝ小松ならなく
是ハうたがひのや二ツを一ツのむすびに用ひてそのへ
りや二ツありてもかくいふ例もあるべく

堅 き
春やとき梅もや遅き年の暮　莫山
是ハしおくれ春やとき梅もや遅きと切たり

堅 き
涼み貝殻かるくや玉祭　去来
是ハむすびり秋風のかるくやうきと切たり

堅 き
若葉ふく風やたゞさへ刈よき　嵐雪

是ハも　かるべきのこゝろおもむく
堅 き
麦秋の田植やおそき常時　許六
是ハ時ける時麦秋の田うゑや遅きと切たり

千載
君なくてよりぬらしつる袖のかわかぬハ君がおもひの種やなくれけり
是句ハ詞にしかきゆゑ八きとむすびたるハ
いらしまれあり此等くなきハ聞くかるべきのこゝろ

堅 き
子供らハ風や嫌しき峯の栗　渓花
是ハこゝの栗子どもらハ風やられしきと切たり

古今
秋萩も色つきぬれハきりぎりす我寝ぬごとや夜るハかなしき
是ハこゝのやハ上よりぞのや数ホそかる时ハ八きとな
るも何ハしきとむすぶ格之此発句も評ふ
もかるべきのこゝろあり

堅 し
本がしら匂ひや付し帰花　支也哉
是ハ花ハ帰り花風よりほひ香しつてにと切たり　此句の
にハ引その趣きびすもあるとみるべし

下五 し

妻なしと家をやくれし女郎花　荷兮

是ハをしなへし 妻なしと家をやくれしと切たり

日枝き
いもうとを持みしけるハ口なしの色まやみえてしと山ぶきの花

是ハやまふきの花色まやみえてしと近し花の色之

まし

古さとを毛やつげよしこどり馬　湖月

是ハめでたる古さとへ花や つゞけまし と切たり つゞけまし ハ
つゞくりしのごとくむかしの反しまく

まし

忘られぬ岸にちらし花の代　無名氏

是ハ落葉もつかやとまちらしと切たり 散らしハ
ちらんらしのごとくらむのなしるべるかの反らくと是ハ
二つまとへしく

古今
たそかれハ残るあたりの白色の花ぞ行まてやつてまし
つまりしハうてんかしのごとくハ

彩勒
もの川うきられ波の青黒の妻むかひ舟人やくぐらし
こぐらしハこぐらんしのごとく

是より下ハくさく科やをいふぞ

や

十九二十科格

ふかひ科をを動かぬ詞にてむすぶ格也

や 二十

風流のむしめや奥乃田植唄　大和従

是ハふかひのやよりかりて動かぬ詞にて唄と留りたる
下へ顕らんと三字入てを示まと合て吟すまず一字
二十の格く此格ひを示の切ともいふこ諸家ハ元例乃
此格ハしきれハ元なべし

や 二十

菫草小鍋あらひし跡や是　曲翠

是もやよりかりて是と留りたる下へ顕らんと三字
入てまは皮もと合て吟すまて二十の格く

や 二十

花ちるちりてやちらて菜畑　軒柳

是もやのてりふれば畑と留りたる下へ顕らんと三字入
て吟まくて二十の格く又二の句つめすて留りたるも一の
句つめまて留りるもそろり

や 二十　是やこれ雨をきく人下きぶみ　其角

是等ハ下より上へかへりて下きぶみ是やこれ雨をきく人と留る事あれば人と留りたる下へ加へらんと三字入て中の言まで二十の格也

や 二十　庖丁のあてるや嵐さくら鯛　木得

是も下よりかへりして桜鯛庖丁のあてるや嵐と留る事あれば嵐と留りたる下へ加へらんと三字入て中の言まで二十の格也

や 二十　高涼し雲ゆくあとや秋の風　宗祇

是ハ風と留りたる下へ加へらんと三字入て中の言也

や 十九　月花の是やまことのあるじ達　はせを

是ハ達と留りたる下へあると二字入て中の言まで十九の格也

や 二十　麻の香を吹ばゞ山やうすき紅葉　宗祇

是ハ紅葉と留りたる下へ加へらんと三字入て中の言まで二十の格也

や 十九　秋風にさそひ出してや波の音　木阿

是ハ音と留りたる下へ出ると二字入て中の言まで十九の格也

や 十九　小坊主や松にかくれて山桜　其角

是も桜と留りたる下へ咲ると二字入て中の言也

や 十九　新ら田づくりめぐりてや水の音　北枝

是も音と留りたる下へ出ると二字入て中の言也

や 十九　うすき霜にあかさでや猫の盗食　支考

是も喰と留りたる下へ出ると二字入て中の言也

や 十九　ともかくもならでや雪の枯尾花　はせを

是も花と留りたる下へ加ると二字入て中の言也

や 十九　みぞれふる音や飯の出来る迄　盡好

是も迄と留りたる下へ来ると二字入て中の言まで十九の格也迄と留りたるをでと留ると心得る人あれども

奇には
千載
文字にては訓放ちて次を重発の意分け字名のところせき 近き
是ハ近と留りたる下へあると二字入てすゞしく
これらハのよりかゝりて動かぬ詞にて留りたれ
どもこれにてハ近と留りたる例を見するのみ

や十九 角力取ならぶや秋のからにしき 嵐雪
是も錦と留りたる下へあると二字入て上五文字まで十九の格也
此動かぬ詞にて留る格は発句のごとく一の句づめにて
も留二の句づめ又ハ上五文字よりしても句に律留るとも
留るもあり 千年に一の句づめにて留るハ

や二十 山や寺来ぬ紫吹てぬ嵐かな 作者不知
是ハ山や寺来ぬ紫吹来ぬ嵐かなと留るところを是来ハ
上ないつゞく 此れらひハ山谷のやとなると同じ 数のや
を動かぬ詞にて 留と留る下へなんと二字入二十
てくるところを合て中のことにて二十の格也此格ハ一の句
づめにても二の句づめにてもかくいふがあるくらゐするより

いひかけてとゞの留る格

てにはより上へかゝりて切るゝも有り此類ひのやハ
雪や花ナラン花やみるナラン 水や月ナラン 月や水ナラン 霜や煙ナラン
花や雲ナラン 雲や花ナラン とつゞくてにて上をなし下を上にまわる
時ハ制らんと入て実をまんをつくべし よくていはゞしく
秋や今 今や秋といふハやのむすび詞にしむすびて
切るを 今や秋 今や来ぬといへハ動ぬ詞にて
留りて十九二十の格なれども 今や来ぬも制らんといふ心
にあるなり 来ぬるも秋の今もなるぶるとの事
ゆゑ思ひさされバ 今や秋 たつや来ぬ といふハひるてとく
とんぬべし 又上より うちびのや 疑言葉なりゆくる
時むすび詞のくもつふむるにハ千年にまより
くらんのことの心 制らんの言の知ありと知るべし 余も
足にならべてんぬべし 同じするきいくたびもいへきは
るさしとふおもひ取ひそ

いひかけ

のべ竹に千代万代やかざり縄　可全

是ハのべ竹に千代よろづ代やこもらんといふをあるを
かざり縄へいひかけてとめたり

いひかけ

山姥とつひには成ぬや立田姫　立圃

是ハ山うばとつひにはなるやらんといふ事あるを立
田姫へいひかけてとめたり

いひかけ

裸成に麻の白ひやまとひ衣　許六

是ハはだかに麻のかたびらやまとふらんといふ事ある成
角力えへいひかけてとめたり

いひかけ

紅葉せぬ心やまてとまつ川の風　宗祇

是ハもみぢせぬ心やまつをまつらんといふ事あるを
松の風といひかけてとめたり

新古今 いへ
深の秋露やよそにもしられけんあへぬ袖をも人のとふ迄

金葉
東路をさするかよひつる望月の駒ありてかひやあふさかの関

○新古今のうたハ空蝉のあらく掛やよそにあらめんと
いふをとりわすれていひかけてむすびて
下へつゞきたり

○金葉の方ハ東路をさまよひいづる望月の駒
まこらひやあふらんといふ事あるを逢坂乃
関といひかけてとめたり

是より下ハむすび詞に「不及」やのくさぐさをいふ也

切るや

切るやハ凡例にいへるごとく切字を上に立て
くやまや ぞや じや つや ぬや ふや むや んや
ゆや るや りや きや しや といふ文台の
めにて切るがおほくて句の中に出て切るゝハまれ

くや

木からしも茶摘もきくや郭公　杜城

是ハほとゝぎす木からしも茶摘もきくやと切りたる
ことあり 切るやの説前ハ凡例にくはしく見合べし

くや　春めくや人さまざまの伊勢参り　荷

是ハ人さまざまの伊勢参りを春めくやと切り

くや　ふり落しゆくや廣沢の庵の角　澤雉

是ハ廣沢の庵の角ふり落しゆくやと切り

くや　かぞへんとすればこそや田植笠　吐月

是も田うゑ笠をかぞへんとすればこそやと切り

くや　葉櫻に花かぶさくや初鰹　露山

是も初鰹を葉櫻に花かぶさくやと切り

すや　作り木の糸をゆるすや秋の風　嵐雪

是ハ秋の風つくり木の糸をゆるすやと切り

すや　ふきつらし菅笠にかくすや枯尾花　其角

是もかれ尾花ふきつらしを菅笠にかくすやと切り

すや　やがて染る山をさしすや今の月　乙由

是も今の月やがて染る山をさしすやと切り

ずや　枯すてゝ霜に融けずや女郎花　秋風

是ハをみなへし枯すてゝ霜に融けずやと切り

どや　花の比に数をバ見んどやかしまし　関夕

是ハ花のさかりの花ちるをバ見んどやと切り　惣句ハ散るや月や雨ぬや雨や川や星やきや　ハいろ〳〵ありなしされバ元倒まゞぶせる俳句もてふにつゞせるも同ド句を出せりたゞ切るゝを定まるあるなり　ドの里諺ハ マイ のこと

つや　ちらで雪よつや四月の富士山　焼外

是ハ四月のよしみ山まだ雪をちらぬやと切り

つや　十五日ゆるつや朧月も古手賣　之丘

是ハたまり朧月も十五日ゆるつやと切り

ぬや
燕も時を忘りぬや苗代田　空山
是ハあそこら田燕も時と忘りぬやと切たり

ふや
塩魚の歯にはさかふや秋の暮　荷兮
是も秋のくれ塩魚の歯にはさかふやと切たり

むや
毬栗を袖で流すむや女乃子　秋村
是も女の子のいがぐりを袖で流すむやと切たり

ゆや
埋火もきゆや涙乃煮る音　[illegible]
是もあふぶに煮る音埋火もきゆやと切たり

るや
紅雲を麻にあてるや冬籠　野坡
是も冬籠りをそえあてるやと切たり　此るやハぬるつくるふるけるあるあどのあひにいあふぶ字の列にあのづから切字格の心を持たる例ぶ浅ぶるのあひのるを交て句づめにあるハ切字やく句の中乃まで切りとあるハまれく

りや
前うしろ何りや火桶乃揺し所　存義
是ハ火おけのふでんあるうしろありやと切たり

きや
人情にて咲きや矢瀬の郭公　拾栗
是ハ矢瀬の郭公まれ人情に咲きやと切たり

しや
柿色も日和も形しや村時雨　秀川
是ハ村時雨ふきうむ日和もありやと切たり
●とくのなぶる句ハ●
常に来たしらもあきや彩屋敷
是ハ来しやと子べきを程生のき小冥し得りゐるう
又切るや不作るくろげしる雑のやあり奇小
来め人を主つほの浦乃夕あぎふやくやりけれ庭もこられて
是ハやくこそしはとつくしるをやとくつろげる
やうそ切きだこれハ切やふすうひ安し
紫花方をさ生や此秋の名所に来てはてる山のそれ乃くを
是もさ此日秋とつどく乃をやとくつろげたるや

にて切れず、つゞくつゞけてやこそけるハ山の端々
干ありけれバまことにつゞけたるやのありけれバ
二の句は上三字目　又四の句の上三字目に定りなく
なやしにて用ゆべき也　同じ口拍子しかるを以て
去るべしつゞけたるやハ無る事ハなし

下知を切字を受てやといふも切字也

此やいさゝか歌息の意あり

同
下知や　秋もはじしに毎にむかや瓜茄子　太祇

是ハ秋涼しくて朝夕毎に毎にむけやと切る

新拾遺
上　花ハまだつぼみぬ不の歌あり
是ハ上へうち返して今年もとかく花をとおもふらん　下　こゝろ（ん）　中
よそにてやまのまなびの（の）事やまなび安ければ歌切るやと

同
下知や　踊る事ものとらでいちれや稜もさき　加生
是ハ稜のさき踊る事もおらでいちれと下知にて切る哉
受てやといへり　これらに思ひ下知をて切るを受てや
とのふも切るやく

同
下知や　あつさや蟬も其羽もぬけるほど　其角
是も蝉も羽もぬけるほど永くやと切る

新勅
逢坂の関乃しきぢのあれやと見えしたる清水に影ミん（人）
是ハ岩間より走るゝにたるぶに見ん清水ぞ見えて
関守んあれやと切るる
見てあれど出る（ハ）清水の見ゆる也

同
下知や　早霧乃雲をみよとや鳴千鳥　太祇
是ハ鳴ちどり早霧の雲をみよとやと切る

同
下知や　山つゝし海にみよとや夕日影　智月
是も山つゝじ夕日かげ海にみよとやと切る

新古今
鶯（の）ゆるしみに（ハ）きゝ世のふしの事もあそでに世をこそして（や）かゆむ
くれらにあそびて下知の句を切るをとゝ
受てやと切ることなるべし

此下知して切ることを定て句やと切るゝハ並べて歎息のやといひて下知
よばれとよびかけていひて八ッまのきりくるのなれバ下知して切ることを定
てやるゝハ切るゝやといふべし是ならでひをつる句やなどと其位
ニハねがへりうちひ捨るやうな中にも皆切る句と定むべき
バかりなるのなかるべし、しかれば捨る事ハ句とすべし。
○歎息のやハ切る句やなれども一字にて句ぞやげるや其上の句
にしやなどハたゞ其ままにて切れぞ歎息の句やハなぐくうてり
つきて句やと切れバ月いや霜月いや萩月いや汁なべのあはひ
は切れぞ句づめにて目利もよしや其むかし初五のしのや
なれバ切るとし

歎息のや

是ハなげくことあきて切るやと

むざんやな甲の下のきりぎりす　はせを

是ハかぶとの下のきりぎりすをむざんやなと切りまべて切る歎息のやハ何やな何やのといふ定ある歎息されハ此句にもむざんやといひても切るを下へなくと添りときる

よりてハ歎息の意もくまくなれバ此句をおなじくいぶしけれバおなじひて歎息のままつきて切るといひさだまんなどつくべし

捨らるる世の木槿や蝶まよひ　蓼太

是ハまよひ捨らるる世のむくげやのと切る

ぐらぐらとぬけ初る歯や秋の風　杉風

是も秋の風ぐらぐらとぬけ初る歯やのと切る

陰晴や蟋蟀の出入り耳の穴　丈艸

是も蟋蟀の出入する耳穴陰晴やのと切る

ふとん着て寝たる姿や東山　嵐雪

是も東山ふとん着て寝たる姿やのと切る

からびたる三井の仁王や冬木立　其角

是も冬木立からびたる三井の仁王やのと切る是等ハからびたる三井といふが歎息のこころ

永き日や同じ事して磯の波　素丸

是ハおなじことしていその波永き日やのと切る

ちるなや□麻かる跡の秋乃風　越人

是も麻かる跡の秋の風ちるなやのと切らり是ホハ始ま
歎息のこゝろちるなやといふなり

敬も文読むそこのや□蕎麦粉　吐月

是もそばの花ちるも文まうるゝ趣やのと切らり

引くくも寂しき姿や□釣干菜　探丸

是もつりほしホ一夜ゝくさびしき姿やのと切らり

まづつりや□蓮ま見られて居る人　湖春

是ハ蓮ま見られて居るんまづりしやなと切らりまへて
うらめしやゑしやこれしやこびしやなれしやめで
たしやなどハ歎息のやまて切らるゝやく

まつるのや□松も花とも社とも　素堂

是も松も花ともやしろとも永ふゝやのと切らり是ハ
いつれるやといふが歎息のこゝろ

涼しさや田ま引かけて森かゝり　元来

是ハ田ま引かけてとゞりけり涼しさやのと切らり所
ホは下ホ図りと寄りゝも上へ并返して切りゝハ発句まならり

名月や□繻を枕ま合歓の花　山田羽人

是もひざを枕ま結ぶのうけ名月やなと切らり名
月やといひても不がもるや△なるハ切れしてちハ下
へとほりて下ま切る所ありて下ま切る所なくて動かぬ付
まで寄りゝるハ十九十八二十の格なるもあるへし

詠め清ゝハ嘘ど多かれや□意高低　素堂

是ハ意ゝ高低詠め清とハいまけどいつかれやなと切らり

かく追ひかけるゝ姿や□不しのぶ　調水

是も干蓋かくまきてもうかけるゝ姿やのと切らり

秋風や□のりそめこゝの一葉より　暮太

是ハのりそめこゝの一葉より秋風やのと切らりこれらハ
かりそめこゝの引く葉よりといへるが歎息のこゝろ

百日の(上)あら恋しや(下)あらひ(中)鯉　其角

是ハ百日のあらひ鯉あら恋しや哉と切りてれち みの○まんまるくべし下のあらひ鯉へかゝるの○文字あり

哀しき世や芦がらみ箸の長短　包有

是も芦がらみのもとじゆあそれ哀やのと切る

名月や湖水の水比良乃雪　仙瓢

是も湖水に氷なるの面白名月やのと切り

足ハく今宵ある人や夕さくら　巨山

是も夕に揚これバく今宵ハやのと切り

霖雨や火燵ふとんのさめぬ内　其角

是ハこゝろぶとんのさめぬうちに霖雨やのと切たり

志づかさや岩にしみ入蝉の声　杉風

是ハ岩にしみて入蝉の声しづかさやのと切たり

立出て後歩りや秋の暮　嵐雪

是ハ秋の暮に立出てうしろつけあるくやのと切り

涼しさや夕風そよふ芦の音　了阿

是ハ夕風そよふあしの音すゞしさやのと切り

おもしろき妻あなかな宿や初鰹　葵太

是ハ初ガツヲをおもしろき妻あるき宿やのと切り

今ハ世を頼みしきや冬乃蜂　且葉

是ハ冬の蜂今ハ世をたのむけしきやのと切り

蓬さく(マデモ)茶や打しや彼岸前　大魯

是ハ彼岸前むづかしく茶やさしやのと切りとき これハよくをどぶのことをんなる人あれども よくのことハ［ナリトモ］又いぶ事のことハ［マデモ］［マデカ］［モマタ］のことをたづぬべし ［デモ］のことゝ心得べし

浅め髪を旅の姿や弱むらひ　荷兮
是ハ弱むらひつゞけても旅のすがたやのと切るなり

旅なれぬ刀うるさや村しぐれ　常秀
是ハむらしぐれたびなれぬ刀うるさやなと切るなり

ちらちらに暮かゝる日や浮世秋　涼葉
是ハさびしの秋ちりちりにくれかゝる日やのと切るなり是ゟ八
ちるもみぢとハ子句が欽息の哉

すみつかぬ旅のこゝろや置火燵　はせを
是ハおきごたつすみつかぬ旅のこゝろやなと切るなり

行秋や綿子布子引くらべ　木阿
是ハ綿子ぬのこ引くらべ秋やのと切るなり

両の手に桃とさくらや草の餅　はせを
是ハ草もちを両の手ニ桃とさくらやのと切るなり草もち
ハおさなの祝ひれバこのくらゐなるべし

○歎息のやハ歎息の文字につきて切るゝ右の発句にまぎるべてにんなべし
新古今あふと見てことぞ知るもあくあかずなりにし君の袂乃うけゝれぬくさゝ哉　一切るてぞ
千載五月雨ハたまのぬがくれ袖ぬれてあやめ葺くなる軒の岐乃まなど　新古
これらてなまれるへてんにべし又歎息の心裏といふあり

歎息のれや

是も哉のやなの字一字にて切るなやくと
れや

時ハ今花の世なれや風もなし　宗祇
是ハ風もなしと切り格なぐ下より上へかへる也に
風もなし時ハ今花の世なれやのと切るてれらる
切るし格なまりても是のつぐく所へもちへして切るまず
べき法なんをつくべし

れや
西瓜くふあとハ客遊が原なれや　其角
是もあぢちが原なれやのといふをみて切る所にハれやつ

七ツあれども発句にハ切られやのこともて下にむすび
詞あるれやハえあらんで下にむすび詞あるれやハ
これバにやのこのれやく

上 鶯もとぞ呼びていふさまざまに下とふ人あれや 牧やすむると
いはもとぞ呼びていおのふたまさらに文やさむると
とふ人あれやのと切り是ハ切る格三ツなるを
りされども言ハでさて切る所ハたゞ一ツ也

世中ハうき物なれや人ごとのとにもかくにも心をなやましき
是も切る格なきあれども下よりくちえし
て人ごとのこふもかくても皆くるしき世中ハ
うき物なれやのといふ心にて切り

形ふ之のかや

是も切るやく

切かや 雨降とくしんこそ淀世にかな　大也試
是ハ外ぶ之の外やにて切るふびの中みかやハいひさ

まかせりて下にむすび詞にてもむすぶ格也

切かや よきいふなふ鳴子らかや 白日の月　葵太
是ハなふの月にきやしてある子川かやと切られたるて切
るといふ句づめあるが多し

切かや 得れ扇子に雲掃せかやなふの月　双狸
是もなふの月 扇の扇子に雲そりせかやと切り

切かや 志つく湯るに薦帽子の花せかや桜川　葵太
是ハ流そぎ川 花落るにえほしきせかやと切り

切かや 年の市線香買に出かや舟　女七試
是ハかやの下へ舟をそへりかくもいふとなるべし

合紫
志つせかや 衣のみし渡江に袖ひちて七瀬の淀におりふんを
是ハ衣のしまに江に袖ひちて七瀬の淀に出
んをとして せかやとくちえして切るといふ
ひちてハひさしてのこと

古今
五月来ば鳴もふりなんほとゝぎすまだしき程の声を聞ばや
此なんハつらのなんまて[又べし][又べき]の意のなんと
はやのなんハぞのや疑かのかり時と
むすびはなるなんとなるへし これよりかゝる
時ハふめとむすぶ格之前の意も下略
ぞや而て切る

めや

是も切るゝやまでらく意のかよふやハの意を
述べて へんや ましや も やハの意のめやく

めや

蝿追ふ子妹とはしれめや風催　其角

是ハ風つくり蝿追ふ子も妹とはしれめやと切りて意をしれ
めやハしれまじとうらく意のかよふやハの意を述べて
めや へんや ましや といふ時ハうらく意のかよふやハの意あり
ましけれにをもとてよむべし まじとハ別く

古今
うゑしうゑハ秋なき時やさかざらん花こそちらめ根さへかれめや

是ハ切るゝ格なれども意ハうらくふりてめやと
切るゝやまて秋なき時やさかざらん花こそちらしとうらく意の含
め根さへかれめや 根ハかれハせざるとうらく意の含
やく

やハの意のや

是ハ切るゝやく

やハの意のや
何くのとあつまきけバうぐひすぞや　越人

是ハうりかへも声のせバうぐひすぞやと切るゝをまて
かくびすやハうらびてせるとうらく意のかよふやハの意之

新古今
浅茅原たれくおきし草れ上の露をかゝことと思ひかけきや

是も思ひかけきやハおりひもかけぬあおをと
うらく意のかよふやハの意のやく

うや

うや

是ハ切るゝやく

誰か里ハらん花守の子孫かや　丈せ成

是ハいさゝか歎息の意あるかやにて切たり

玉葉

已るべき時やされバうきくれ我あるべきは昨日の宿

是ハ上へかへして已るべき時ぞやと云なり

是より下ハうたがひのやにてもあれバ切るゝやなきを
うたがひのやまがへる新のやといふ也

ヤコヽヤカレユヤ　ヤ何ヤカヤ

といふ詞を添て味ふ意のやなり

外 十八 あつみ山やふく浦かけて夕涼　はせを

ヤコヽヤカレコヤ

是ハ浦といふ下へやといふやをといふ詞をそへて
あつみ山やふく浦 ヤコヽヤカレコヤかけて夕涼みといふ
詠なり そのへハ外よりかゝりて涼しきこゝろ句
を通りて下へおとし一字入て味ふ意にて十八の格に
此類ひのやハ雑のやにて切れざる句も大事の事也
外ハあつみ山よりかゝりてや [illegible]

定家々集

おもだかや草葉にまじるかきつばた花ふみちらし行ゝ白鷺

ヤ何ヤカヤ

是も沢瀉や草葉にまじる杜若や何ヤカヤの
花ふみちらし おそるゝあらそぎ と要る意也
そのへハ詞よりかゝりくれバ外のかゝりく白鷺と
通りとて下へかれと二字入て味ふ意也

よびかくるよれ意のや

よびかくる意にて切れざる句なり

數 十八 紫陽花やいづて時雨れて退　周指

此やハよびかくるよの意にて切れバ此やをとへて俗
語にていはど「関秋やあるをせよといふよび
かくるよれ意のやと下のせよといふハ下知の意にて切て
意のよく是をなぞへて味ふるよれ意のや あるつもりを
知るべし その外ハ同じと數の例よりつぎて迎と云
たる下へぞと一字入てうかびてとひかくるぞの詞をそえ

を合て侍らで十八の格と十八の格の上よりかゝらハ歳
と外とのこゝろを持てぞの句やそこらのきりに十八
の格なし　かれ是の句の詞ハ

童之案
ちはやぶる神の宮社の弱者ぶりぞやたらむぞある　回
是ホハ明めぶのりそよのことのやくけれひの
やハ擬案にハなし　されバみぶりにハもつとも
きこゆくみるにもよくよく見るべき所ハよくいふべ
きことなり

夕立や田をみめぐりの神ならば。　其角
けりやもよびかくるよのことばやとゆゆ　是もながむるやの
やうにみゆれども今ふる夕立の時ハやとゝいふべけれど
雨乞の句なれバ雨を願ふ心ある思ひよ。此ことの句と
せめる此句のことのひハ韻なるバと余情をふくませて
なりぬる故に余情ハふくませたまへかし　といふことを

下にふくませたりけらし　と留て下に余情をふくませたる
句ハ

杉風
月影の入かたをしむきさに西にハ山のなからまし。。

是も西にハ山のなからましかバ月のかくれましとゝ
いふ詞を余情にふくませたりまで　らましどゝ
とつゞくらば　らといふをのべたる詞と　らまの
交らくらし結ひ　りくりにけり結ひ交　らとつゞめた
下のバを畧て　らバとつゞめたるくされバ此句らましバ
と留りたるにまかせて韻なるバと留りたる
をまさるべし又雨乞の哥ハ

能因法師の雨乞の歌に
天の川苗代水にせきくだせ。あまくだります神ならば神
是ハあまくだりまします神ならハ天の川
なハしろ水にせきくだせよと下知の詞なるを
韻に結ひふくめてあまりたる

小野小町の雨乞ひのうたに小

千早ぶる神も見ませば六字目をきての戸川乃堰口あけまへ。
これらも明らかなるべく下知の附にて留りたり二ぞ
をも千御たゞし詠めたる事なきが其角が句も
神無月ば留りたりとん知べし又かなや
のや八今なる夜明時ハ夕空やといひ又彩子
その時ハ夕空よといふべしおれ其の何やハ
こぶりにハいひがたし下知のよハ切るれどもよび
かくる用よと称がかきのよハ切れぞ

かがむるや△ 是も雑のや文字

○是ハその句意よりてくろげる句やあれが切れぞ前よハ國
郡 名所 地名のとよそてをれ六ハむりよりいひ来れる例
よ志ふがひて是は付やハよひ知しの句やもとへど前も名あるも
がめるとしとしきれがかがむる句といふべし切るる句あれハ心ぞ
下よ切字ある定りて又かがむるやの下よ切字なき八十八よ九
云十の格ぞ付やハ季志てくさ侍よりて是くし句毎よいつもく

あへ此用捨差別あるべきやく

△元日や△神代のこともおもはるゝ　守武
是ハ元日かかりたれバ外のつりそふて切るゝ

△かくれ家や△命をうつむ鶯から　壱欧
是ハ鶯ようて合をむすむと切り 是も外のかかりく

△名月や△柳のえなる秋空へなく　嵐雪
是も外のかかりなきくと切れたり

△春雨や△翠も拂ふし森もなし　相之
是も外よりかかりて現在のしるとて切れたり

△文月や△六日も常の夜には似ず　はせを
是も外よりかかりておもきも切れたり

△草の戸や△暑を月にとりのこし　秋峯
是も外よりかかりておもく切れたり

△
春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏　はせを
是ハ屋根のもりをも蜂の巣つたふと切れり 是ハ何とおれども蜂のすをつぎたれバ巣といひよりかゝりてふと切れり これらも外のかりといふ外といふハ次の句のやうにかゝる類こそ切れ外といふこともあるべしかと外のかりとんなるべしかと外をとハ所間外次よりいへり

△
蠅うちや手ふとれば又蠅も飛し　一之麦
是も外のかりにて既出の◦しまで切れり

△
雪解日や思ひぞいづる寂しさる　吐月
是ハ雪解日と思ひぞ出るし切れり ゆがむるやうにきれたる故に類こそ外にあれてもさいらバ

△
梅が香や酒の匂ひのあるしき　蝉甫
是ハ何かかりにてしきと切れり

△
鬼灯やうるれて秋の涙てゆく　漁文
是も何のかゝりにてくと切れり

△
蓮やそ餘ハおちられ岸まさく　乙由
是ハ外のかりにてくゝと切れり のとわれども此句のハあちらの岸とつゞきたれバつめのく

△
むさし野や月まれバそ行られ　波静
是ハこゝそよりかゝりたれバれと切れり

△
行秋や葛はらみもふりむらば　吐月
是ハ外のかりあれバ野と切れり

△
鞠杖や思ふ何よりいえもえだ　人左
是も外のかりあれバドさきれたり

△
少女やなくまだ物へ椿てゆく　来擢
是も外のかりにてくと切れり

汐こしや鶴脛ぬれて海涼し　千代

是も汐こしのつゞきなれバ隔字のしほこし切なり

帝の笛見の遠くさのふくさき　嵐雪

是ハのゝりかゝりくれバしきりと切なり
此句ハ源氏の横笛の巻よりいでたるをさふらひし時のるを
を思ひよせしなりと知べきなり

清涼殿のあけがたなるふくひあそんとてたゞしき弓つく名ぎ
り持なく志づくもよしなくひぬらしのすべハいふ筋だ
けなりとぞいへり　下略
これら就てよく俳らり名ある物語などをとり一句に
いひかへしく字中る物して何ぞ物語くさ源氏物語に
くらべ伊勢物語・古今著聞・古今六帖・吏宋抄ともに準陰に
連歌又発句などもん様あるべきなり

元日や何はたゞん朝ぼらけ　忠知

是ハあさぼらけはまさしくん切かゝりかくらちかへしつち

こゝまでもかなしむるやハ千手のまゝ迄て下ほどのかたちなり
此句ハ拾遺集に
「世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆく舟のあとの白浪
この二の句三の句をとりて言をとへたり　むかしの歌の
云ハ句にしたがひて詞ひとつ句をとりて手ことばをさへ
たるがおもしろし

勝秋や潮のふくれ月　吐月

是ハ水の月やうしなふと切なり　是よりハ何よりかゝ
たりくれなるも外のかゝりにいふ

夕暮や秋ハ色なくよしなくべしかな　去来

是ハのよりかゝりてかなと留りなりかなの上のかゝりハ
の一外一かな　此でとくはのと外とよりかゝりゆく
かなと留るとん結べし上よりぞとかゞひの切数こそも
こそそよりかゝりてかなと留りなる例なし何でも
がひのやも数詞も云ひても結びて結びてい
すなの外数かゝりきてかなとも留るも此あるやは

切れざる字の無きが如くいづくにも此格は俳諧の要句なれば何れといひてその法あり是は句の部に詳なり爰にてはあがむるや抔下にかゝる体の切れにある證句に出せり

あがむるやの下に切れて用ゆる句は

△新古今 山おろしや本来花を吹からし嵐ぞうらむ関の杉むら

是は関の杉むら嵐ぞうらむとかへりて下しさてこそ嵐ぞよりかゝりてむと切るゝ

△古今 大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ

是は引うたよりかゝりてめと切る

△新古今 鳰の海や月のひかりのうつろへば波の花にも秋は見えけり

是は外よりかゝりてけりと切り これらはなだらかにてあがむるやの下に切れずしてかゝる格をしるべし

あがむるや抔動ぬ詞にて留まる事十八十九二十の格之

△十八 灌仏や目出度ことを寺参り　友彦

是は外のかゝりなれば参りと留まる下へまでを一字入てことを含て呼出しする十八の格之

△十九 君が代や松竹ともに鶴亀　越人

是も外のかゝりなれば一つと留まる下へありと二字入て呼出しまで十九の格之

△十九 恋しくば梅や別るゝ遠所　宗因

是は詞よりかゝりなれば外のかゝりと取と留まる下へありと二字入てりとてはそれ故含て呼出して十九の格之

△十九 暁や屏の中ゆくきりしもを　次々

是も外のかゝりなれば菜と留まる下へいづと二字入てつとてはそれを含て呼出して十九の格之

△十九 名月や思へばちゝはあらぬ物　有佐

是も外のかなりあれバ押し留りける下へあり。と二字入て
切とてうちをもて代合せ添へて十九の格と

△十九　幸崎や△泊り合せて初時雨　品　随友

是も外のかなりまて泊。と留りける下へふ。と二字入て
うけたまはる十九の格く

○あかむかるや小町を動かぬ句まて留まる歌ハ

△宝暦集　ふごり笠や△小川のまゝに志づめどもまちに同じ山の端乃月　品

是も外のかなりまて用。と留りける下へあり。と
二字入て中まて付顔ひもつとおほけり

あかむかるやの下ハいひかけまでむすび有るを

△いひかけ　高寺や△清き錦乃紫草　一井

是ハ外のかなりとつまみのむすびとむすぶことあるを
まとまれ事入いひかけてむすびけり

右のごとく多分ハ行るやハ動しさいふしられどもやハ言さ数多

よりてくさくまれバ多きに付れども多分多くハ見えしばし余ハ詞
お末に志るせり見るべきなり

か部

かハ下まむすび辞あるもありむすびをたしかにせざるもあれども
むすび詞ハぞのや類ぬのむすびと同じ格く　かハやよりも
つるやうあれども　かハ加様にありや。ハやの外あればや。とか
を同じくて留りたる類かてしく

●との(か)ぶる多分ハ

●苗塩を体ゝ所やとぶほする

●吹風の相手や荒き月うつ

是ハかとつべき所をやといふ事のむ是をかにして見れ
苗塩を体ゝ所か投ほする　是ハ枕草苗塩を体ゝ所かと作て言あり
吹風の相手か荒き月一つ　是も荒き月一つ吹風のおもかとはなく言く

○切字の句は上下切字を交てやとるひ。切字句は上につゞく詞を
交て句といふ。又下にむすび詞ある句は上下切る格を交て
句といふ類多く、句はむすびを残しおかせざるもある類なり。又さして
いの句やおもひかへすやうにいふは前にいへるごとく文章にはあるべく
もみじかくもいはるれども句の切字にあらず。それより口語にか
はりきとよまるゝよりて。かやうにやなどいひまはしてなるやうの
ものも見ゆれども、そも又二字三字迄字余情を恨る例之句の外
をやよ得たるは今世人の誤りにはあるべし。只旧の流よりあるやあり
まれるを改めざるの科なりけらし

○やは句に切るゝやうなれども句はつゞくふきのかろきもあり又つゞ
くにつゞくふしあるもある抱なれども、つゞくひのやの字は推量して
志りあらんと思ひあがり やといふとのあれはつゞくひのやの字
にてあるきはいと心得べし。されば志るべき梅さくさをあつべてなれ

雪降るや世にちるものの　田植唄
八年も菊やいかに九日と印をきめる

蝶採やさそはれていづる　許和
瑞実やとりつきめぐる岩の上
梅子や前後も人をうらむらん
喰ありや門前ありく冬の月

是等のつゞくひのやは上のやの字とあるにはあらねども、さゆ こゝに
くしけ開閉ひは名をあらしつひてはよき所へやと至り
一つは下にやをとぢかゝるき用ゐて上へ至りとつく一の句つゞけなる
つゞくひのやはまや をや よや へや などのことのつゞくひの
やあるはつゞくひのやの字をしるしてあるは

風　世をごくと山やくれけん花見櫓
陰がれる雲や志ぐれて老鶯山
あら紫ふく風やたなびての刻よき
新らる力やありてきくなるけ。。。
下　波やたつ皆がゝはちぐ村雨
大　名やおふ見るくもぬ秋の月
下　堤やこゝに名残夢人。。。　上下　涼

風　夕ぐれや書付けさん笠の露
風　風ふく白ひやつけしかへり花
風　まれしと家々ややくれしも
風　麦秋の田植や遅き住る時
風　露やなつこそてしあせて　萎
風　水やのむは用も見て涼し　杉子
風　風流のそでめや更の田うるゝ。。。

入 庖丁のゆくてや嵐さくら鯛　貳 菫草小溝かくれし流や是

是等のてにをはのやハ並にたしかに此ゆけ哉ひの並所
よき／＼発句をあつめてうたがひのやおもえらんあるべし

かをもむすび辞まてむすびて切るハ

六 く
夕月のさえるからごく　村落　不角
是ハむしもこき夕月のさえるからごくと切らり

六 く
かんこ鳥我もさびしいか飛てゆく　乙由

俳撰 もぬけぬる月日も志らぬかそて年もふるきをそぬきく

る
水鳥の静行ゆゑか志づかなる　李由
是等ハかなむすび詞ありむすび詞ハ何ぞのや　数ハの
むすび詞の格と同じ此かハやらんの辺のかなかハ
かなむすびをたしかにせざるもおなじ

俳枕 みゆきとか世ハふりて今ハさび来未のさくらちらしぬありけり
是等ハむすびをたしかにせば

ここし
し
紙子にも霜のおくらと捨てにし　去来
是ハかを是去のしにてむすびて切る此句を言なに
霜やおくかと捨て見し とあれども やとかと かさ
なりてあれバのとありしをや字に写し誤りり
とおもえる写本にハのとみえて正し

貞本 新撰古今集
● 君のみや何たもがも見ん斧の柄は朽ちし山の岸行もみちなき
是ハやとかとうちてこれハとくのままで此句古写本にハ
君のみや・あだ見るらんとありて正し
右のごとくかハなふむすびあるもあり又むすびをうしなれ
かざるもそのありとんあるべし

切るてり
さへて切る格ハ上のかうまハかかるに

其外月出汐より出て赤坂か　去也

此句古き京都にハ赤坂やとあり今外ハ赤坂にハ赤
坂かとありこれハ面白し

青柳の影ひく桜か三日月　其角

是ハ春の月青柳の影の桜かなと切るなり

見ぬまでとおもハれ安き時鳥　蓼太

是もほとゝぎすを見ぬまでをこがれありくかなと切るなり

数更阿の月かおいさか郭公　藻風

是も時鳥きてハあの月がなハいさかなと切るなり

風に二日外月のふきちるか　荷兮

花の雲鐘ハ上野か浅草か　去也

切れ捨けてくるめ時ハいろ〳〵までも下のかまて切れしく

鷲か家か里か川辺の涼かも　其角

是ホハかを略するなり是も下のかまて切れてもと
涼しけれハかくかくにも涼しけれハ新ひの外乃里語ハ

サテモ　とかく語て添べし

古人
秋の月山辺さやかに照せるハ落る紅葉の数を見よとか

是ハ桜の花ちるをおしみ人しあらざれハ春雨
のふるハ涙かもと切るなり

古人
秋風の吹上にたてる白菊ハ花かあらぬか波のよするか

是ホハ三ツ乃かを合して下のかまて切るなり

同
天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも　サテモ

是ハかもと切るなり

らしく言の字　かハ

らし　たゞらし　馬鈴の神は昼外方　周木

是ハらしハ言の字なり

是ハくゞる扉のくゞり神の神かハ神のとがにハあらずと
うらみたるうたる句にて切るなり

かハ

おも縁なしといひつ鍔を嗜ぬか　木阿

是ハ物をあらしといひつゝふるをくるしぬ句にしてとくしく
ものたる句ハそれ切るなり此あらバにある句ハでとい
ふことをあらしといふことの句と是ホ心あられるものつくく

何義
我君ふことのちぎりまして晴れバ千代のふの萩乃千枝に　うたの句
是も千のびの萩のちえハ抽「句」抽の影にハあらまで
とりしくものたる句にて留りなり

千載
とくさずやたのびたつべき源句　袖のちぎりみかくとぞ思ひも
是ハちのびたつべきあたらぬ句　君びたつべき源
にあらざれバ袖のちぎりとりくしとぞ思ひもそう
さ句やと猶ぞふことの句やまて切る事のもそ　又
句ハのことあり句のそれかハあり　やハのそれや句や有
やのそれやハあるそのとまこふてつとくべし

が乃部

句が上下ともむすびのあるしまた又むすびをとらし
うまぜざるしまた抽くむすび句ハぞの句や　疑ある
同じ格之

六　を

やまも子が夙紅粉かも雪丸め　探丸

是ハあちれめきもこがつまべにかれと切るなり

六　る

郭公あくし風が雨にある成　利牛

る

萩蒔月ハ細きがあられある也　作者不知

此ぞとくむすび句ハぞのかや疑ホのむすび句と同じ
格も又がももむすびをさしうませざるとまた抽とんべる
べし

抄き
我わの梅れちえや君てつんむひの分子君がき啼せる
むすびをたしうにせざるハ

拾穂
秋の田に稲てふこをとみしかバせひ出る句これしげもあらし

これらハ本意をいひてよろしきとおもちろれ
を時ごとく本じと現在のしまて皆り有り

疑乃部

疑とハ　か　かこ　かれ　いか　いづ　いで　いく
本など本ぞふれたが
あとのおもひのくらびの句をいづして疑と
いひてことをよろしとんちべし

く　を　つ　ぬ　ふ　む　る　き　し

㊅ く

いくらか時雨かけぬく瀬田の橋　丈艸

是ハ世ふのそしいくらか時雨かけぬくと切るり

㊅ を

古今　本ちを宗ふのあごりてちあぬんとて何ふハ寄をよておぶむく

たれ人か摩ふきてみよれ花の雲　大石

是ハ心の内人かこもさてみちをと切るらは首下
あるハこしを見てたれ人るまたとおれとも写本の方

ちくべさせのうくけありれバ下本ハ不用

㊅ を

初時雨本ふ見ひ出ていけゆへ　濡水

是ハ初しぐれけみてあふ見ひ出しと切るり

捷衣　ひとからぞたりのふハ秋もやむべきをふど二度おもひあやまれ

㊅ つ

三世の神ハいかに春しる貝の音　破笠

是ハ貝の音三よしあひハいかにきるべしと切るり

今案　笈日格　夜の秋ハ月待わびのまきさみて岩まる清ふいくむるびし

不 ぬ

人ハあどちるを見て居ぬけし花　岸水

是ハけしの花人ハあどちるを見て居ぬと切るり

新古今　其葉ハちぐりよれど時まるあど気あむをしこえる古せぬ

ふ

あびらぬハ誰をとか忍ぶ女郎花　暁山

是ハ女郎花へしあびらぬハたれをとか思ぶと切るり

千載
さむきよをかしよかくれるつゞ氷ぞみなのちしめをゆるしまゝる

六　む
六月ハ何を業とする淀の人　鞭石
是ハ淀の人さとぶれハなにを業とするむと切なり

誹諧撰
たれぞこハなにをさらしやむ逆さまみれまるらべハおとりしもせじ
是ハなにをこのまれまる花ぐハおとりしもせじ
ちゝみハなにをさらしやむと切なり

六　むん
なま魚のなぎしに並ん菜花枝　芳良
是ハきくのえぶ鮒魚のなぎしにおるんと切なり

六　むん
郭公どれから此ん池の廣さ　柳風
是ハ池のひろさ幾るどれから此んと切なり

六　むん
鰹とりいれる人を酔せらん　未徳

古今
をこれし秋の野風にちなびきんひとつならんよれらん

万葉
まつらよ人を思ひ見ていかならんいづれの日ふかまるとよ思ふらん

古今
淺川なかみなよ上をみなれたん抱かれ吹の蛙なありけり
是ハ下のけりにて切なり

後撰
ごぬるもくるもくるしきまつらいかふおもひころなれ

古今
まそ日此の花火の神守いで見よ今いく日ありて若菜つみてん

る
蝶の羽れいろいびこゆる堤の子　未徳
是ハ堤の中ね蝶の羽乃いろいびこゆるしと切なり

六　る
風乃日ハなにかられたよる時鳥　枝風
是ハほとゝぎ風の日ハ何ぞあらうとよるくと切なり

る
舞姫ふいろいび指を折たる　荷兮
此句前なまハけりとおれども是ハ字々誤りあるべし
なる鰭よりかゝりてりと留りくる例なし　変格の奇よ

変格
源氏以下
おきてゆく宿も忘れぬ恨られなといづくれ若のうる袖なり　吹
是ハ変格まて有りの下へけんと二字入て見るべし

同
風雅
いろ見えぬ松もなかなり　吹
萬代なときそるゝ色ふ花もさけれど

是も発格にて其詞に自ら花をさけ
れバ色えぬ松もあるなりけり。と二字入て味ふべし
○疑ひより切りて留りたる発句なれハ左
にて見るべし

古今
花ちらす風のやどりハたれかしる我にをしへよ行てうらみん
是ハしりてうらみんと切なり

新古今
思ふとも思ひ出るよひしをまつハいかなる心なる

古今
世中ハなにか常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふハ瀬となる
是も下にて留りたる

同
咲花ハちぐさながらにあだなれど誰かハ春をうらみはてたる

同
君をのみ思ひこし路の白山ハいつかハ雪のきゆる時ある

新続古今
言の葉をたのむべしやハ秋くれバいづれか人の色かはるらん
同やハうたがふやハの意

拾遺
ふかく思ひそめつといひしことのはハいつか秋風吹てちりぬる

千載
水なれし玉藻が床のうき枕[illegible]

かくのごとく疑句の上より切る時ハ下をむすぶ事
まれなり。とむすぶ事あし又疑句の下にかといふ
ていにおほく是を留りてやといふ事も見
ゆれど疑の下にかといふべき所をやといふ例ハ
見えたれ

堅き 七夕をいかなる神にいのるべき　沾圃

堅き たけの子や力をあまりあふぐべき　几非

堅き 山路来て何やらゆかし菫草　はせを

是ハ世にしれたる山路来て何やらゆかしきと切りたる句なれど
本手ハ切字なきゆへ何れハ字余の心をもちいざれバ
疑言よりかゝりて下ハ留字の事をそへてむすぶ格にて留字の
しるして入むまぞ

拾遺
なかぬ松と[illegible]の末の世をいかなれバとこのまゝぞへん
是ハど[illegible]下へつゞくるにハいづれえしもゝとえハ見ひ

がきゆゑにむすび詞をそへざらしにてはたらず
かつぎより是が下へつゞくる時のこゝろにてあべければ
ときはあしびきのやの疑ひにかゝる時ハしきてし
いひたる詞ハしきとむすぶ格之外よりうくる時ハしきて
とゝのへる詞もゆるし疑ひし なびし と注す
のしなてむすぶ格なれバしきもしバ注意之

古今
潮津せの中の渡ハあはてまことあなき鐘の音のふちせともなき

拾遺
浅茅生れ小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき

疑ひし

霞盛ある峰の山吹の香ぞ訓 疑 言

疑ひのしハつるよハつゞく格なれどもその疑ひより
うくる所ハむすびとなりてなし切りたり

疑ひし

朝顔にいつ宿出し御使　其角

是ハ御使あさがほにいつ宿出しと切り疑ひのしハ
つゞきハつゞく格なれバ宿出しそし御使とつゞくやうなれど

どちも上よりおくりよりて上へつく詞下へつく詞の切ると切
ざるところにこゝろをつくべし

古今
あさ人がまてぬきかけしふちえ多くる秋にハ神辺をもはまし 疑

は
花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきに恋ひんとか見し 疑

まし

月に花たれかてえなまし志賀の山　起石

是ハ月と花志賀の山たれかてえましと切り

新古今
志ら雲の跡の山の八重さくらいづれを花と折てきまし

家隆
東路やとづの持れちらへていくへ雲の下にくらし

疑ハ疑ひ何のごとくむすび詞とのなふがといふてむすばれバ
その心ハそのぶべし 疑言も同ひするより下のむすび
とふ反などの詞あるがあればけ於いぶ文疑言をとゝめ詞みて
かゝるハ十八十九二十の格も是をもけしかいぶさせり

是より下ハ疑詞乃くさぐさの格をいふべし

(題)

十八十九二十附格

題 十八 大津絵の筆のはじめハ何仏　ブ　芭蕉

是ハほとけてとひかけるその答なれバ常に題て仏と留りける下へぞと一字入て吟じ見て十八の格也

題 十九 宇治墨の嵩焼ハいつから御所　一井

是も題なふ下へまるかと二字入て吟じ見て十九の格也

題 二十 いつとなう雪ふりまぎれてなく千鳥　千那

是ハ題よりかゝりて鳥と留りける下へなりんと三字入て吟じ見て二十の格也

題 十九 梅柳いづれ娘子のはし所　亀林

是も題よりかゝりて所と留りける下へなりと二字入て吟じ見て十九の格也

題 二十 いづく時雨笠を手に持て帰る僧　芭蕉

是ハ一の句つゞきて留りたる時雨と留りける下へなりんと三字入てやよりかゝりて笠を手に持てかへる僧いづく時雨なりんと吟じ見て二十の格也

題 十九 芭蕉葉ハ何になれとか秋の風　路通

是ハ芭蕉と題よりかゝりて風と留りける下へなりとて二字入てくとてみるをも合て吟じ見て十九の格也されども下なる八何ゝなれとやあれどもすべて題の下にハ何とといふ例のごとくてやといふ例なれバ二十の方を出し

題 十九 木がらしにいつも音して雨嵐　正秀

是ハいつと題よりかゝりて嵐と留りける下へなりと二字入てくとて吟を合て吟じ見て十九の格也是も句中にハいつもそうしてやとあれども何をもいへるごとく題句の下にかとといふハ例なれども題の下にやといへハなりやとつげていへる二ツのごとくすべて題句ハいつかたれかいづれかいまかいづくかなにか

ともいふ詞がをかへまへしたる格となるべし されバ下に
まちかたきふし侍りき

○疑詞の下ににと結るハ

拾遺
夏衣をいつあらしてかなう此葉のなかし散にハ招にもおこせる
けいつと疑の詞ハ三句のつめのせるとまへかりたり

古今
たが里によがれをして郭公たゞこゝにしも寝たる声する
是もたがの詞下のするとまへかりけり

新古今
まろぐとまんくをとむる袖のえにたが泪ぞとおもひつる
是ものごとく疑とそむすぶ詞とゝの下によるへしハかうへ
又疑の下にやといひてとゝの入る事なけらし

夫木
我君の千世ハいつくとまでもみんあれよしとかもぎふのみげ
きハ
なべて疑の下にと文字あると疑の下にも文字なと
ハたゞ詞あれバ下のむすびにて不及さとある事なれ
ばとらがひの詞ありても妨げなし

金葉
いかにして咲ける花はめるハ天の戸よりやさしかはらん
イツノマニヤウ
いつしかといふ詞の里語ハ イツノマニヤラ イツカク
イツノマヅ といふ意なるハたゞ詞なれバ下のむすびのやありても
妨げなし 又 イツノマニ といふ意の いつしかハ
下にむすび詞ある例え

拾遺
我まちきく人をながむきながらなきよのつくなき年をおくらん
此あまといひうるかびのうちもありふかいひ給へ
是ホハ あまのつらぬ なき世といふ詞なれバ下有
とがびのやといひても妨げなしまへて疑の下ま
も文字又と文字あるいたゞ詞なれバぞやこそ
にかまわりてもさはりなし

題十九 雨雲し雲にいづくか峰の雪 宗祇
是ハいづくと疑よりかゝりて雪と留りたる下へあるを
二字入てみると示新集を合てゆきまても十九の格え

けなどいひてあり。たり。とくり。まる。ぬ。つ。めり。らし。
などの類ハ上より類辞くりかへしの詞やはよりかゝる時ハそら
をまもりてハ係りんの留れ係りがあるべし　有る詞　留語も皆
係りんといふ事になるもなりとも通ずべしされバ是等ハ重。
係りんの其の有るとみるべし　係むの及ぶ之

いひかけならでむすぶ格

いひかけ

めりくと落葉を何と神無月　貞徳

是ハめりくと落葉ハ音までうむ、ことむすぶべきてにをはなるを
神無月へいひかけてとゝめたりけめりしといふ詞ハ古き
詞と見るてふるき詞あるハ俳者のんもおしまれて來し
くものとの也

いひかけ

いかしらぬ稲を干たる瀬の大井川　其角

是ハいかしらぬ稲をほしたる瀬のありさまとむすぶべきてにをはなるを
大井川へいひかけてとゝめたりけりも同じ事なり

いかしらぬ稲をほしたる瀬や大井川とかけれバ写本の方正
しかれバ出たるいかしらぬとある詞の留りハ上下にかゝるごとくんなる係へ
しこれらもかとある下まそらびの詞やのあるがごとき、まるそ
発句ハ言葉てにをはき故まてべき事ハ少ならざるべし

○いひかけてむすびたる句ハ

金葉
つかまつり神もうれしとこゝろさき山。ふる葉の松の千代乃ためし

是ハ二葉の松の千代のけしきをいかなつり神も
うれしと見るらんとむすぶてにをはなるを見さき山へ
いひかけてとゝめたり

數のおふどとかゝる詞

是ハむすびに不及詞也

あらは木で思ふにたれし帰花　某山

是ハ名り花何の木と問事もなしと切たり是木花何。
の木なりんといふ事あるを係りんといふ詞をてへふくむ
なるとの事なるべし詞也

在撰
ゆふこともまの光りハ見るなくにまぎみよしの山ハ雪ふる

是もいごとならんといふことあるを制せんとなる辞をとゞへふくませたるなり

なよ見れく梅しが菓の白きかな　巴丈

是もなまぞと何あれバ下ハのかゝりてぶく留りたり
これらハ何ともなくとはいふことあれバたゞ詞く

古今
秋風は山の木の葉もうつろへバ人の心もいかゞとぞおもふ
これもいかゞあらんとぞ思ふといふことあるなどぞ一
制せんといふ何をふくませられバたゞ詞くされハ
ぞといひてぶともむすびて切たり

疑の下にぞと留る詞

是もさぞ何あれバむすバる変

梅咲やなにがふりても春ハ春　かゞ　千代尼

是ハなにがふりてもさるハ春梅さくやと切りやまて切たり
此切字やハつまりく歎息のことてもあり

秋きとの目荻薄ハ見れく　鬼貫

是ハ古きよりかゝられバ○のかゝりもそぐと切たり

常さし菊やいつも見る時雨　尚白

此やハなどもやハなれバ切れぞもよりかゝくれバ是も
○のかゝりく時雨と留りたる下へ制せんと云字ふへてこゝ
とまをさ△試合て此まてさて外よりくる二十格之

なまめとの見るとても似ぞ三日月　李由

是ハ三日の月なぞこの見るとてみても似ぞと切たりぞの
や疑よりかゝる時ハ下の此まてむすぶ格く是ハ○の
りなれバぞと切たり

時鳥いつまこのぎりも誰もなし　現在　尚白

是もなまてんてん留べし疑よりかゝる時現在のきこえ
むすぶ格なれども疑の下ぞとあるハたゞ何ある曲ゑ外の

かゝりそたれもおしと北玉のしをてむすびて切たり

いく年の白髪も神乃むかし哉　去来

是も同じく疑問の詞あれども下にもとなればただ何となる也ん
下にかとも いつくれハのかゝりにて哉と留りたり 付句
を去来抄に太宰府奉納の句とありて

許六云 発句ハ切字二ツ用ゆるハ法あり
付句切字二ツの病あり

とあれども切字といふハ千ことの留る所を切ることいふ
を付句ハ何に切ることのもとて切る所二ツハあしき也
て疑の下に詞をへだてゝかとあるもただ何となる也

彩古今
こゑきれてゐるんへぞつゞ旅衣いくへつきぬる山路なりとも

是ハ旅衣いくへつきぬる山路なりとも こゑきれ
てもんへぞつゞと切りてまく是ハ詞をへだてゝ
多けれどもたゞ何ぞ又

正秋
いづくよりもくすり寝子秋の月なればある人さへおりかゝれるかな

是ハのかとありし されば去来が句ハ病にあらず
許六ハ人も知れる俳士なるになどてひがことをいひ
るぞやこれらをそれに定規の法までもおろかなる
ことよのおいらさりし

咲るハいふらんひ詞

是もただ詞なれバむすびに不及

誰やらが姿に似たり今朝の春　芭蕉

是ハ誰さのまちられやらが姿に似たりかと切り付句にいふ
いふ疑ハ人にむかひてよその人をいはれにさして
いへるをいふ誰なりもあれ誰にのつかれて
もなどいへるハさかひのまふあらざれバ是もうたがはぬいふ
疑といひて

古今
みちのくの忍ぶもぢずりたれゆゑにみだれんと思ふ我ならなくに

是もそこさるいふ疑にて君より人に対して他の人を
これゆゑにみだれん君ゆゑにこそみだるれといふ

ことなれバ他をさしていふ歟と叶ひハたゞ詞まで
下のむすびに不及

なま心得ぬハ土まれ草一本　忠知

是ハも物ごのんじつかぬといふことなれバうたがひの詞
なからにうたがひのことなるれバ他をさしていふ歟なれバ
下に歟ふともいふなり

風雅
人それぞ思ふんどしへてもなまるかひふくなりぬなきかな

これらもなまのかひもなくといふことなれバ歟の詞
にてもうたがひのことにあらざれバ下まで歟と付
いふなり　これらハ詞よりかゝるれバ歟のかい
まく歟ふと切りけり

切字歟

うたがひてとひかくるぞまで切字格ハその
外まいざなり

笠きるやいづこの月のぬかり道　ちせ氏

是ハ此月のぬかり道かさきるやいづこと切り是ハ上まで詞やと

いづ所ともやいづこと切字もおなじ

見ふこぞあげかしハたまご月ん舟　其角

是ハ月見舟見ふこぞなげかしハれと切り

玉祭ふ母屋の妻戸の主ハ誰　嵐雪

松かざり伊勢が家買ふ人ハ誰　其角

行春の本社ハいづこ甚多き　昌碧

是ハ春ホと行そぎの本社ハいづこと切りいづ
詞ハ切字格にて下はむすびあるハ所もあれし

主ハ誰木綿ながるゝ秋の雨　尚白

是ハ秋の雨ホとながるゝめしハ誰と切り

花笠を着せて似合ん人ハ誰　其角

古今
あはれの小ゆめやいづこよろぎれいその浪分沖よりいでなり

是ハこほろぎの夜のあはれけ仲よりいでくりまぐ
れの小ぐめや、ぶりゝと鳴りくり

匠拱
世の中ハいろ〳〵やいろ風の音秋きゝても今ハその〳〵やゑぶきゝ
是ハ風の音秋ものも今ハ袖やかれしき世界ハ
いろやいろ〳〵に鳴るとなり

饒古録 上巻終